2019.4.23　小山田　修

イスラームの物語（その１　無明時代 から　初代正統カリフまで）

【　概要　】

⑴イスラームの歴史を学ぶと、その初期において消滅しなかったのは、何度も繰り返された僥倖の結果であるように思える。イスラームの側からすると、それは“神の思し召し”による必然なのだろうが、信者以外の者が観察すると“歴史は、しばしば偶然によって作られてきた”という説の、このうえない証明のように見える。僥倖の例のひとつは、布教を始めたばかりのムハンマドが、マッカで迫害され命まで狙われたときに、300km 離れたマディーナの町で、たまたま、2 部族が激しい諍いを繰り返して消耗し合い、町の存続が危ぶまれて、第三者に調停を依頼せざるを得ないという、稀な事態に陥ったため、ムハンマドが調停者として招請され、これでイスラームが生き延びたことである(622 年)。

⑵マッカに凱旋し、さらにアラビア半島を纏めた直後、ムハンマドは後継者を決める時間もなく急逝したため、イスラーム社会は大混乱に陥った。その危機を乗り越えた 2 人の正統カリフの時期に、彼らは『大征服』と呼ばれる急速な膨張を遂げた（下図参照）。

第２代正統カリフのウマルの時代までにイスラームの支配下にはいっていた地域(緑色)
（ムハンマドが、マッカからマディーナに逃亡してから２２年後には、このような広大な地域を支配下に治めた。「大征服」と呼ばれる。）

だが、正統カリフ時代に、イスラームの内部が一枚岩に結束していたかというと、全くそうではなく、４人の正統カリフのうち３人が、イスラームの者によって暗殺されたという事実から見ても、イスラーム内も激動の時代であったことがわかる。

⑶イスラームは「クルアーンか、剣か」という二者択一を迫った、というのが、私が高校で世界史を習った時の説明だったが、これは、キリスト教側が意図的に流布させたもので、実際には彼らは、ユダヤ教、キリスト教の信仰を容認したため（税金はイスラームの信仰者より高かったが）、イスラームへの改宗は 200 年～300 年をかけて、緩やかに行われた。なお、クルアーンは神の言葉そのもので、アラビア語でムハンマドに伝えられたから、アラビア語以外に翻訳されたものは単なる注釈なので、祈りには使えない。日本人のイスラーム信仰者も、祈りにはアラビア語のクルアーンを読誦している。

⑷イスラームの初期においては、女性が公けの場所で活躍していた。創始者ムハンマドが若い時に働いていたのは、後に妻となったハディージャが自ら経営していた商会だった。ムハンマドがイスラームを始めたのは、妻ハディージャの励ましのたまものであり、ハディージャがイスラームの最初の信者とされている。　　第２代カリフのウマルは、公式の場で女性たちと議論し、マディーナの市場管理者に女性を任命している。ハディーシャの死去後にムハンマドの妻のひとりとなったアーイシャは、後に、自ら軍勢を率いて、第 4 代カリフのアリーと戦ったが、当時のアラビア半島では、ほかにも女性が戦場で戦った例が記されている。

このように、女性が公の場で活躍した初期のころから見ると、現在の、女性が表に出てはならないというイスラームの多くの国に見られる状況は違和感がある。こうなった経緯について、いくつかの研究があるが、それらについて要約している。　【補遺１】
またイスラームの一夫多妻制度は、他宗教からしばしば非難の対象となるが、その背景を考えることが重要で、私見をまじえた考察を記している。

⑸ 古代エジプトの文字の発音は、現代では、誰にもわからない。
古代エジプト文明に接するときに、遺跡に刻まれている神聖文字（ヒエログリフ）はまことに印象深い。ロゼッタストーンは、紀元前 196 年に制作されているが、その表面には、エジプトの神聖文字、エジプトの民衆文字、ギリシャ文字（これも古いもので難解であり、解読は、相当な苦労の末だった）の３つが刻まれている。ロゼッタストーンを通して、エジプトの神聖文字の意味は、解読された。

だが、神聖文字を、どのように発音するのかは、誰にもわからない。それは、“5000 年経過しているゆえ、発音の変遷があり、古代の発音はわからない”、という経年変化の問題ではない。答えは、エジプトがイスラームの大征服によってアラビア人の支配を受け入れてから、徐々にアラビア語が使われるようになり、エジプト人は、1000 年～数百年前に、長い時間をかけて、古代からのエジプトの言語そのものの使用を、全くやめたからである。　【補遺２】

⑹ 十字軍は、当時のイスラーム社会に、たいして大きな影響を与えなかった。
現代のイスラームの過激派は、1096 年からおよそ 200 年続いた十字軍運動について、「イスラームに対し、一方的な戦いをしかけた蛮行であり、そのためにイスラーム社会は深く傷つけられ、現代に至るまで根強い不信を作った」と断罪している。
しかし、イスラームの歴史家の評価は、下記のように、かなり異なっている。

「十字軍運動は、一方的な蛮行であった。その結果、キリスト教国の側は、イスラームの高度な文明、イスラームの地に伝わっていた古代ギリシャの哲学などを知って衝撃を受け、ルネサンス運動の元になるなどの大きな影響を受けた。
しかし、イスラームの側にとっては、キリスト教国の文化は遥かに劣っていて、吸収すべきものは殆ど無く、一進一退で行われた戦争も、十字軍が来なくても、繰り返されていたイスラーム内部の抗争とさしたる差異はなく、とりたてて大きな影響は与えられなかった。
むしろ、十字軍運動の末期に生じたモンゴル軍の襲来は、圧倒的に凄まじいもので、イスラームは、モンゴル軍との戦いに殆ど勝ったことがなく、『神は、常に我らと共におわします』という信念をぐらつかせ、神学上の深刻な論議を必要とした。」　【補遺３、補遺４】

⑺ これまでの歴史学では、『定住農耕民族が文明を創り上げてきた。一方、遊牧民族は有意な文明を創りだすことはなく、定住農耕民族の周辺に棲息し、時に農耕民族の居住領域を侵略し征服王朝をたてたことはあるが、多くの場合は定住民族に従属することによって、定住民族の創り出した優れた文明を導入し、それによって次第に文明化していった』、という説が有力であったように見える。
これに対して最近の歴史学では、『遊牧民族も、独自の文明を創り上げてきた』或いは『遊牧民族こそが、その迅速で広範な移動能力によって、世界史の主要なダイナミズムの担い手であった。』という説をよく目にする。　【補遺５】

【　本資料について説明　】

本資料は、イスラームの初期の歴史に興味をもって、いくつかの図書を読み、私見も交えて纏めたもの。
記述の多くは、しかるべき出版社から刊行されている図書に拠っているが、中には、相互に食い違う主張の項目がある。その場合は、これが事実ではないかと推定されるものを、個人的に選んだ。また、意外に感じたことを多く記している。
これらの理由から、タイトルを“物語”とした。

＊＊＊＊＊＊＊
用語解説

イスラーム：この言葉自体に宗教を意味する言葉が含まれているので、ここでは「イスラーム教」という表現はしない。

都市名の表記：日本では、長く“メッカ”と表記されてきた町の名称は、“マッカ”という表記のほうが、より現地の発音に近いとのことで、最近の多くの専門書には“マッカ”と表記されている。同じ理由から、従来メディナと表記されてきた町は、マディーナと表記する。

ベドウィン族：そもそもは、アラビア語で“町に住んでいない人々”を意味する一般名詞だが、ふつうは、アラビア半島の遊牧民を指す。彼らは、今のイエメンのあたりに農耕に従事していた者が、人口が増えてきたために、そのなかの勇気あるものが、沙漠地帯に生活基盤を求めるようになった、という伝説があり、農耕にしがみついている者を軽蔑し、世界一誇り高い部族とされる。
マッカのクライシュ族や、マディーナの住民などは、このベドウィン族と考えられており、今のサウディアラビア国の人々も、同様である。

シリアの範囲：第一次世界大戦終了後に、英仏が武力によって分割統治を始めるまで、シリアという地名は、今のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、パレスチナの全てを含むものであった。この資料でも、シリアは、この範囲を示す。

アジアとヨーロッパの語源：紀元前数千年のアッシリア地方の言葉であるアス（日が昇る地方、東）、エレブ（日の沈む地方、西）が、語源とされる。

アナトリア：ギリシャ語で「日の出」を指す言葉。ギリシャからみると、今のアナトリア半島が東側にあったため、この地をアナトリアと呼んだもの。

小アジア　：古代ギリシャ時代の人々にとって、世界はギリシャと、北のヨーロッパ地区、東のアジア地区（今のアナトリア）だけだった。やがて、アナトリアのさらに東側に広大な地域が広がっていることわかり、それまでアジアと呼ばれていたアナトリア半島は、小アジアと呼ばれるようになった。

「沙漠」と「砂漠」
沙漠とは、水が少ない土地のことを示す言葉であり、砂漠よりも、沙漠を用いるのが適切と考えられている。日本沙漠学会の表示でも、こちらを用いている。
砂漠という漢字は、砂丘などの砂だけでできた、ごく限定された状態を指していることになるが、実際の、沙漠と呼ばれる土地の状況は、砂のみから成り立っている部分はごく一部であり、大半は、砂のほかに乾いた土壌、小石、岩石などに覆われており、植物の生育はごく限られた土地、といえる。
沙漠とは、「一年の殆どの時期において、降水量よりも蒸発量が多い地帯」というのが、正確な定義という説明もある。漢字の成立時期からいうと、沙漠が古くからあって、砂漠は、かなり後になってできた言葉のようである。

１．無明時代（イスラームの始まる前）のアラビア半島の状況

ムハンマドがイスラームの教えを始める前の時代を、イスラームの人々は、無明時代（ジャヒーリヤ）と呼ぶ。イスラームが始まる前は暗黒であったというのは、イスラームの偏った見方だが、イスラームの登場で、世界史におけるアラビア半島の意味が一変したのは、事実である。

（１）アラビア半島の地理的特徴

アラビア半島は、地球最大の半島で、トルコの位置する小アジア半島の約３倍、日本の約 8 倍の面積を有する。その殆どは沙漠に覆われている。紅海沿岸とペルシャ湾沿岸の直線距離は約 1100ｋｍである。（東京から鹿児島まで直線距離で約 1000ｋｍ）

アラビア半島が沙漠化した時期は、講談社「興亡の世界史 第６巻：イスラーム帝国のジハード」の p25～26 には、紀元前 2000 年～3000 年と記されており、その前は湿潤だった。エジプトにおいてナイル川以外の地域が乾燥化した時期（紀元前 13000 年頃）よりは、かなり新しい。

発掘調査が進めば、乾燥化の年代は、さらに明らかになると期待される。

アラビア半島は、現在ではイスラームの聖地があり、石油・天然ガスの産出地域としてエネルギー資源からも国際的な重要性が高いが、6 世紀の初めころまでは、世界の歴史には、さほど影響を与えていないように思われる。

半島西南端のイエメンの地域は、天水農業ができることと、季節風を使ってインドとの海洋交易がおこなわれ、貴重なアジアの香料の中継地として栄えていた。当時は、季節風の利用も香料の産地も極秘扱いされ、ローマの人々から、うらやましがられた。なお、その昔、ソロモン王を訪ねたというシヴァの女王の治めていた国は、イエメンに存在していたという説が有力で、ここは、アラビア半島では例外的に、アラブ人の独立王国があった地域と考えられている。

なお、紅海を隔ててイエメンの対岸のアフリカ大陸の、今のエチオピアのあたりに、アクスム王国があった。年間降水量が 1200㎜ に及ぶ地域が多く、農地にも恵まれていたこの国は強い勢力を持っていた。古くからインド、ローマなどと交易があり、重要な国であった。
325 年頃に、アクスムの人びとは、それまでの多神教信仰をやめ、キリスト教（エジプトのコプト教をもとにしたもので、今のエチオピア正教につながる）を、国教として受け入れている。これは、彼らがアラビア半島経由の交易を拡大しようとして、ペルシャのサーサーン朝（ゾロアスター教を国教としている）と勢力争いになり、そのため、対抗上、一神教のキリスト教を選んだという説明がある。

（２）シルクロードの一部としての活況

シルクロードは、古くからローマと中国の間を結ぶ交易ルートであり、東西両端のみではなく、中間に位置する地域にとっても、重要なものであった。6 世紀の半ば頃は、シルクロードの西の端は、東ローマ帝国と考えてよかった。

（西ローマ帝国の滅亡は、一応、476 年とされているが、滅亡時期を定めるのが難しい。その約 100 年ほど前から、実質的に帝国としての統率力は失われ、秩序は崩壊し、東方世界との交易は、困難になっていた。
西ローマ帝国の滅亡後、複数の東ローマ帝国の皇帝が、旧西ローマ帝国の所領を回復しようと試みている。最も成功したのは在位 527 年～565 年の皇帝・ユスティニアヌス一世で、東ローマ帝国は最初の隆盛期を迎え、ローマ帝国の最大版図のうち、殆どの部分を回復するほどであった。だが、皇帝の麾下の将軍たちが、かつての首都ローマに、文明の地を期待して入城したときに見たものは、人口わずか 500 人ほどの、荒廃しつくした場所だった。）

6 世紀の半ば頃、東ローマ帝国とサーサーン朝との抗争が激しくなると、シルクロードは西に向かってはペルシャで途絶えてしまった。そこで、東ローマ帝国に至る新ルートとして、サーサーン朝を経由することのない、アラビア半島を経由する道が開拓された。（下図参照）

アラビア半島の多くは沙漠地帯であり、オアシスを結ぶ道に通じているアラビア人が活躍し、通商の経由地としてマッカが栄えるようになり、そこに巨額の富が蓄積された。

（３）アラビア語の発音の与える影響、アラビア半島における詩の重要性

現代でも、アラブ人を「ダードを発声する者」と表現する場合があるという。ダードとはローマ字のＤの重い音に相当するが、アラビア語特有の響きである。
当時は、ダードを含めてアラビア語を正しく、美しく発音し、使いこなすことができる者が、人間としての質が高いとみなされた。自らの言語に対する誇り・信奉が強く、また、定住民族よりも、基本的に遊牧民族である自分たちを優れた者と考えていたことも重要である。従って、物質文明の量としては遥かに進んでいた東ローマ帝国およびサーサーン朝に対して、アラビア半島の人びとが、臆せぬ心情を有していたことも、イスラームの拡大の一因と考えるべきと思われる。

ムハンマドがイスラームを始める前のアラビア半島の背景で、特異であったのは、詩である。時には、戦争の勝ち負けを、詩作の出来具合によって決めたこともあるという。自分の種族の高潔さ、勇猛さを詩にうたい、詩によって争うことが重要であった。また、遊牧生活を送る人々は、邸宅などの資産を持つことに価値を認めず、家畜や天幕など、身の回りの物事を語る美しい詩や言葉が、貴重な財産であった。

（ギリシャでも詩作が行われ、中国では漢詩が流行した。室町時代に朝鮮から通信使として日本に派遣された朝鮮の役人と、日本側の接待役の武士たちの間で、漢詩を詠みあうことが意思疎通や友誼のために盛んに行われた。また、日本では、万葉集の時代から民衆が作ったとされる防人の歌があり、江戸時代には俳諧が多くの人に親しまれた。
このように、世界の多くのところで詩の役割は大きかったが、この時代のアラビア半島における詩の位置づけは、格別なものがあったらしい。）

アラビア半島において、イスラームが登場する前の最も高名な人物の一人が、ラフム朝（アラビア半島北部のイラクとの間にあった王朝。サーサーン朝に服属していた）の４世紀の始めのイムルウルカイスという王であるが、彼は詩人としても有名であった。（京都大学学術出版会　：シリーズ諸文明の起源４「イスラーム文明と国家の形成」ｐ１６より）。

ムハンマドが生まれた当時は「詩人の時代」と呼ばれるほどに、職業者としての詩人が多くいて、人の心を動かす詩、美しい詩を作り、社会的に大きな役割を果たした。

（４）マッカは、古くからアラビア半島の信仰の中心

マッカはオアシスに開かれた町で、古くからカアバ神殿（カアバは英語 cube に相当し、神殿の形を表すもの。カアバ神殿は幾度も立て直されてきたが、形状は、その名のとおり、ずっと立方体であった）の地としても有名で、アラビア半島の人々の巡礼の対象であり、カアバ神殿の祝祭の 3 か月は、アラビア半島内で、種族間のいかなる争いも禁じられていた。

マッカには、人が定住できるだけの水量の泉はあったが、農業を営めるほどの水量はなかった。そこで、マッカの人たちは、商行為を営むことによって、町を運営していった。多い時には、ラクダ 1000 頭からなる商団を組んだといわれるが、その場合は、総量 150 トンの荷物を運搬できたという。

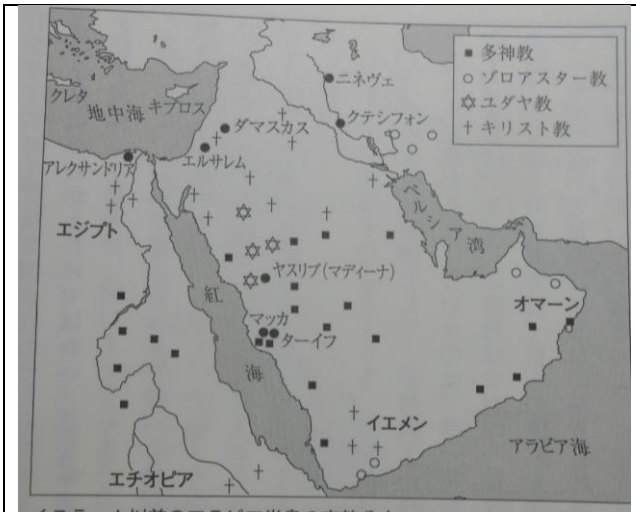
シルクロードの一部として機能し始めてからは、多くの隊商が交易のために行き交う町として栄えた。だが栄えたとはいっても、当時のマッカの人口は、たかだか一万人程度のものであり、仮に、ムハンマドがイスラームを創始しなければ、ある時期にシルクロードの重要な道筋であったというに過ぎず、世界の歴史に影響を与えた程度は、ごく限定されたものであっただろう。

２．ムハンマドによるイスラームの創始

ムハンマドの始めたイスラームによって、マッカあるいはアラビア半島は、世界の歴史にとって、おそらくムハンマド自身の想像の域を超える大きな影響を与えることになった。たった一人の、周囲からは単に極めて誠実な人間とのみ認識されていた人物が、“神の啓示を受けて”始めた宗教が、２１世紀を生きる我々に対しても、なお大きな影響を及ぼしている。

（１）ムハンマドが生まれた当時のアラビア半島における宗教分布

ムハンマドが生まれた当時の、マッカ或いはアラビア半島における宗教の分布を示す資料として、講談社の「興亡の世界史：第６巻：イスラーム帝国のジハード」のｐ４０には、”イスラーム以前のアラビア半島の宗教分布“という図が載せられている。（下図）



イスラーム以前のアラビア半島の宗教分布

●の記号は、主な町を表す。

この図では、マディーナにはユダヤ教しか記されていないが、「興亡の世界史・・・」他を読むと、多神教徒が多数派であったと考えられる。

マッカに隣接する町ターイフは、マッカから60㎞くらい。高地にあり、夏も比較的涼しく今は避暑地になっている。
ムハンマドがマッカでの迫害を逃れるために、この地で布教を試みた時に、厳しく拒絶されたことがある。

この図には、当時のアラビア半島の中に、ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教、多神教が、さまざまに奉じられている状況が記されているが、さらに重要なことは、この図の近くに、文章と系図によって記されている次の趣旨の説明である。

「アラビア半島の人々は、彼らの始祖について、次のように伝承してきた。

『人類の始祖であるアダムとイブの子孫のアブラハムが、妻のひとりハージャルとの間に設けた子供イスマーイルの子孫が、アラビア半島の人々の先祖である』

（なお、アブラハムのもうひとりの妻・サライとの間に生まれた子供イサクの子孫が、ユダヤ教、キリスト教につながる人々である、とされている。）

カアバ神殿はアラビア半島の古来の神々を祭っており、それこそが、マッカが長く敬意をもって特殊な地域とされてきた理由であるが、ここには、いにしえの時代に唯一神への信仰があったことが伝えられている。　」

つまり当時のマッカでは、自らを人類の始祖であるアブラハムの子孫であると考えていたこと、多神教のほかに、一神教についての信奉も以前に行われていたと言い伝えていたことが重要である。つまりユダヤ教、キリスト教の、いわゆるセム的一神教と呼ばれるものと同じ範疇に入る一神教が、アラビア半島に古くから存在していたと考えられることが、注目される。

だからこそ、マッカの人々にとっても、唯一神という考えや、ムハンマドが神の啓示を伝えられたという大天使ジブリール(英語では、ガブリエル）については、何らかの知識があったと考えられる。

（欧米の研究者の多くは、ムハンマドが神から得た啓示はユダヤ教やキリスト教の影響がアラビア半島に及んだために得られた知識によるもの、と推定している。日本でも 1995 年版の山川出版の高校生向け教科書「詳説・世界史」の p95 には、『アラブの預言者ムハンマドのはじめたイスラム教は、ユダヤ教やキリスト教の影響をうけて生まれた厳格な一神教であるが・・・』という記述があり、これは、欧米の研究者の多くの意見に、当時の日本の研究者が賛同していたように読める。

だが、「興亡の世界史：第６巻：イスラーム帝国のジハード」の著者は、イスラームの起源について、なお未解明な部分がある、とはしながらも、30 年に及ぶ自らの研究の結果、『ユダヤ教やキリスト教の影響がアラビア半島に及んだため』、という主張を、安易な説明であると批判している。）

なお、キリスト教徒は、“旧約聖書についてはユダヤ教のものと同じものを共有している”と言われているが、イスラームは、ユダヤ教及びキリスト教の旧約聖書と全く同じ内容を共有しているわけではない。人類の始祖に関する話などは似通った点があるものの、両者は、さまざまな点で異なっている。

（２）ムハンマドの誕生、「象の年」、妻・ハディージャとの出会い

ムハンマドは、西暦 570 年頃、マッカに、名家クライシュ族のハーシム家の一員として生まれた。彼の祖父は「興亡の世界史：第６巻」p52 の記述等によると、一時期、クライシュ族の指導者であったほどで、そのころは、ハーシム家はクライシュ族の中でも名門であった。

今のエチオピアの地にあったアクスム王国（キリスト教国）は、一時、イエメンを占領していたが、彼らはマッカを侵略しようとして、アフリカ象を先頭に立てて押し寄せたが、このときムハンマドの祖父がクライシュ族の指導者であった。象など見たことのないマッカの人たちはさぞや驚いたことと想像されるが、イエメン軍内に疫病が発生したのか、彼らは戦いの前に撤退した。マッカでは、当時は暦年というものがなく、何か印象的なことがあるとその出来事を冠して「〇〇の年」と呼び、その後を「〇〇の年の何年後」、という表現をする。イエメン軍がマッカに象軍を率いて迫った年は、「象の年」と呼ばれ、この年にムハンマドが誕生した。推定では、それが西暦 570 年とされているものの、明確な証拠は発見されていない（京都大学学術出版会　小杉泰著：シリーズ諸文明の起源４「イスラーム　文明と国家の形成」ｐ１５）。

ムハンマドの幼い時に両親が死亡し、はじめは祖父に、祖父が亡くなったのちは伯父に、育てられたが、親戚の中で預け先が変わり、辛い年月を過ごした。このためムハンマドは、一生の間、孤児や寡婦など、家族に恵まれない者たちを気にかけていた。

ムハンマドが物心つく頃には、ハーシム家は、かつての勢いを完全に失っていた。後に、ムハンマドがイスラームの教えを説いたときに、クライシュ族の多くの者は「何十年も前に没落してしまったハーシム家の者が、神の言葉と言い出すとは」と、反発した。

ムハンマドは、当時のマッカの人びとと同じく、伯父の隊商の一員として、シリア（第一次世界大戦終了後に、英仏が武力によって分割統治を始めるまで、シリアという地名は、今のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、パレスチナの全てを含む）に出かけたこともある。周囲には実直な青年と認められてはいたものの、後に、世界史に大きな影響を与える人物となると予見させるような出来事は、何も遺されていない。

（現代でもそうだが、特に古い時代には、後に大きな業績を成し遂げた人物について、しばしば、将来を予想させるような、才能あふれる幼少年期の出来事が伝えられている。　しかし、ムハンマドについては、そっけないという形容があてはまるほど、翻訳も含めて、読み込んだ全ての日本語の書籍に、『若い時には、とりたてて傑出したことはなかった』、という説明のみが記されている。）

ハディージャは、二人の夫に先立たれた富裕な未亡人であった。彼女は、亡夫の遺した財産・事業を管理し、自分の才能で商団の経営を続けていた。　彼女は、ムハンマドの実直な人柄を聞きつけ再婚相手に考えるようになり、経営する商団がシリアへ派遣する隊商に雇った。そのときの働きぶりを確認し、ハディージャは結婚を決意した。彼女にとっては３度目の結婚であった。ハディージャはこの時 40 歳で、ムハンマドより 15 歳年長であったが、容色に優れ若々しかったと伝えられている。
ムハンマドにとって、ハディージャとの結婚は裕福になることであり、それだけでも幸運なことであった。だが、ハディージャは、それ以上の存在となった。彼女は、ムハンマドの最大の理解者となり、生涯ムハンマドを支えた。次に記すように、イスラームが始められたのは、彼女の存在の賜物といえる。

（３）イスラームの始まり

ハディージャとの間に 2 男４女が生まれたが、男子はいずれも幼い時に亡くなった。
ムハンマド自身は安定した生活を送ってはいたものの、マッカの社会には、相変わらず飢えた孤児や恵まれない人々が大勢いた。
ムハンマドは、内省的な性格で、よく山中を散策していた。そんな散策のときに、何者かがムハンマドに、強圧的に命令してきた。ムハンマドは何事なのか理解できず、ただ恐怖をもって受け止めた。何者かがムハンマドに「読めっ！」と迫り、怯えたムハンマドが「私は字を読めません」と答えると、なお、恐ろしげに「読めっ！」と迫った。何度か、このような応答が繰り返されたのち、何者かが言う言葉を、ムハンマドがそのまま繰り返すと、何者かは、ようやく頷き、次の章句を告げた。

山から、恐怖に震えたまま家に帰ってきたムハンマドの恐れを鎮めたのは、妻・ハディージャだった。彼女は夫をなだめながら、山中で何があったのか聞き出した後、思案の末、従弟のワラカに相談した。ワラカは当時のマッカでは数少ないキリスト教徒であったが、ハディージャの話を聞いて、接触してきたのは大天使ジブリール（英語名ガブリエル）ではないか、と答えた。

ムハンマドは、その後も何度か、大天使ジブリールからの接触を繰り返し受けるうちに、誦まされているものが神の啓示であると確信するようになり、ハディージャも、その考えに賛同した。そして、ハディーシャからも励まされ、人々に伝える決心をした。

これが、イスラームの始まりであり、妻・ハディージャが、最初のムスリムとされる所以である。ムハンマドが４０歳の時のことで、当時、アラビア半島では、「人生の長さは 40 年」と言われていたから、普通の意味では、晩年であった。ムハンマドの受けた神の啓示は、人が従うべき基本原則を示したもので、後にクルアーンと呼ばれる。

ムハンマドは、詩人に対して、否定的であったという。それは、初期のイスラームの人々も同じだったらしい。ムハンマドは、実直な人物であり、嘘をついたことなどない、という評判であったが、一方、詩人は、時には誇張して伝え、時にはありもしないことを歌う、というのが、イスラームから見たムハンマドと詩人の対比であった。

一方で、ムハンマドが神の言葉として伝えたクルアーンの表現は、詩人の詩作の方式とは全く異なるものの、聞くものに深い影響を与えた（形式としては、韻を踏んだ散文）。そのことは、敵対するクライシュ族の者たちでさえも、認めざるを得なかった。クライシュ族は、クルアーンがただならぬ衝撃を与える言い回しや章句となって紡ぎ出されていることを認めたが、それは、多神教の中の憑き物の神・ジンが取り憑いたためであるに違いないと、非難した。
実直なだけと思われていたムハンマドが、かくも衝撃的な表現を伝えることができたのは、それが、そもそも神の言葉にほかならないから、と信じたことも、イスラームの教えに人々が帰依する原因のひとつであったという。

なお、現代においても、クルアーンはアラビア語でのみ読誦されるものであって、アラビア語以外のクルアーンの翻訳はクルアーンとはみなされず、単なる注釈である。したがって、イスラームの人びとは、必ずアラビア語によるクルアーンを読誦しなければならない。日本人でイスラームを信仰されるかたも、クルアーンの読誦は、アラビア語でされるらしい。ムハンマドが伝えられたのは、言葉の紡ぎ方も、発音も、抑揚も、全てを含めたものが神の言葉であるので、そのままを読誦しなければならない。
（日本のインタネットでも、クルアーンの（アラビア語の）読誦を聴くことができる。
意味は全くわからないが、感じるのは、あたかも音楽を聴いているような、不思議な感覚を覚えることである。）

キリスト教の聖書の場合は、日本語に翻訳されたものも聖書としての扱いを受けている。聖書の原語は、旧約聖書はヘブライ語、新約聖書は古代ギリシャ語ということになると思われるが、キリスト教徒の中で、これらの原語に接したことのあるひとは、ごく少数であると思われる。そもそも、これらのキリスト教の聖書は、神の言葉そのものを伝えたのではないため、言語にこだわる必要はないと思われる。

（４）マッカにおける布教

ムハンマドは、はじめは、神の啓示を、用心深く、友人や身近な者に限定して話した。こうした秘密の布教期は３年ほど続いた。
その後、クライシュ族全体に布教を始めたが、多くの者は、驚き、困惑し、反発した。クライシュ族全体として、「それは、いにしえの伝説にすぎない」と反応した理由は、マッカに古くから一神教の言い伝えがあったからである。

イスラームの始まる前のマッカでは、人々は多神教を信じており、カアバ神殿に多くの神々の偶像が祭られ、これらの神々の偶像にお参りするために、アラビア半島の各地から、大勢の人々が集まっていた。多くの神の中のどの神を主として信仰するかは、基本的に部族ごとにきまりがあったが、カアバ神殿の中には、キリスト教を意味する偶像もあったという。それは、シリアの商人たちと交易を続けるためのものであった。

アラビア半島の多神教の信仰は、自由なものであった。そこには、厳しい戒律はなく、飲酒も賭博も誰からも咎められない。聖典も神官組織もなく、神の言葉を伝える預言者の存在など、考えたこともなかった。死ねば骨になるだけのことで、死後に、現生の行いについての裁きもない。

これに対し、ムハンマドの説いたイスラームの教えは、自由を束縛する抑圧的なものであった。いくつもの従うべき振る舞いや、禁止事項があった。死ねば全てが終わるのではなく、まもなく訪れる最終の審判の日に、生前の行いによっては厳しい処罰がくだる・・・。（イスラームとは、アラビア語で、（神の命令に）従うという意味。神の意志に従い、神の禁止していることをしない、という意味である。イスラーム教徒のことをムスリムと呼ぶが、ムスリムとは、絶対的に服従する者という意味。）

マッカには自由があったが、それは裕福な人々のためのものであった。マッカの有力者は、アラビア半島の東西貿易を支配して巨額の富を得ていたが、高利の利子が横行し、金持ちの大商人がますます裕福になる一方で、食に事欠く貧しい人々は放置される、飲酒や賭博が横行し、貧しい人々は虐げられ、女性の多くは忍従に耐えねばならなかったし、忍従しても一生を全う出来ない女性が大勢いた。

これに対して、ムハンマドが神の啓示として人々に説いたのは、

- 神は唯一であり、人は唯一の神を信じなければならない。
- 人は神の前では、皆、平等である。
- 神の偶像を作ってはならない、偶像を拝してはならない。
- 人は働いて日々の糧を得るべきである。
- 金利を得てはならない。
- 飲酒をしてはならない。賭博をしてはならない。
- 金持ちは、貧しい人々に喜捨をして、彼らを救わなければならない。
- 女性は、尊重されなければならない。
  寡婦およびその子を救うためにも、男は 4 人まで妻帯することができるが、新たな妻帯にあたっては、以前からの妻の了解を得なければならない。
  夫は、全ての妻に平等に対せねばならない。
- 夫が死亡した場合に、妻にも遺産相続が認められる。（男性に比べると不利だが、女性に遺産相続が認められたのは画期的。イギリスで女性への遺産相続が認められたのは 19 世紀）
- 間もなく、最終の審判の日が訪れる。生前の行いの善き者は天国に、悪しき者は地獄にいく。ムハンマドが、唯一神の教えを説いて以降に唯一神への信仰に従わなかった者は、悪しき者である。

これらの教えは、当時のマッカを支配していた者たちにとって、自分たちの日々の行いの多くを否定されるもので、殆どの者は激しく反発し、受け入れる者はごく少数だった。ムハンマドと彼の教えに賛同する者たちは、さまざまな迫害を受け、中には命を奪われた者もいた。

反発の理由はいくつも考えられるが、その最大のひとつは、「ムハンマドが、神の啓示を得て、それを人々に伝えた後に、なお、多神教を信じ続け、イスラームへの改宗を行わないで死んだ者は、間もなく訪れる終末の審判の日に、地獄に落とされる」というくだりではないかという気がする。

また、アラビア半島では、親・祖先を大切にする伝統がある。アリーという名前の人が、自分を名乗るときに、“〇〇の息子アリー”と名乗るほどである。彼らにとって、先祖伝来の多神教の教えを否定されることには、激しい抵抗があったことだろう。

イスラームの教えの信者となったのは多くが若者で、しかも貧しい者たちであったが、中には、アブー・バクルのような、ムハンマドと同年配で、しかも富裕な者もいた。女性信者も多かったが、それは、イスラームが女性にとって救いになったからである。当時のマッカでは、女性は著しく不利な状況にあり、ハディージャのように、自分の能力を生かして自由に生きる女性は稀だった。例の一つとして、夫が妻に「お前は私の背中の母のようだ」と宣言すると、事実上離婚状態になり妻の権利を消失するが、しかも夫の家からは離れられない、という恐ろしい慣習があった。クルアーンでは、「妻は、汝らの母ではない」と、明瞭にこのしきたりを否定している。

イスラームの一夫多妻制度は、しばしば、非難の対象となるが、一夫多妻制度の背景は次の通りである。アラビア半島では戦いが絶えず、多くの男性が死亡したが、遺された妻とその子供の多くは、悲惨な生活環境におかれることが多かった。一夫多妻制は、そのような寡婦とその子らを救うことを主目的とした制度である。新たな妻をめとる場合には、それまでの妻の了解を取る必要があること、夫はすべての妻に平等に接しなければならない、など、法によって女性を救う仕組みが工夫されていた。

（対比して考えると、多くの国で、権力や財力のある者が多数の女性を得ることは、最近まで公然と行われていた。その場合に、イスラームのように、複数の妻とその連れ子に対して、法の下に平等な扱いを定めた例は、他には知られていない。
日本においては、敗戦による 1945 年の戦争終結まで、明治憲法下の旧民法によって、姦通罪は妻についてのみ成立しうるもので、結婚している男が妻以外の女性と特殊な関係を持つのは、法律的には容認され、社会的にも黙認されていた。その場合に、妻以外の女性が妻と同様の権利を持つこと、その女性の連れ子に庇護を与える義務が生じることなど、法的には一切保障されておらず、1000 年以上前に作られたイスラームの制度が、遥かに優れているように思える。）

なお、現在のイスラームの国の中では、トルコとチュニジアが、法律によって多妻を禁じている。もはや、イスラームの初期の、寡婦を救う目的など消滅しているというのが、理由なのだろうか。そのほかのイスラームの国でも、複数の妻を娶るには裁判所の許可が必要とか、既婚の妻の厳密な了解が必要などの仕組みがあり、複数の妻が例外的な国が、いくつもある。

イスラームは、金利を得ることを禁じてはいるものの、商行為によって利益をあげることは、むしろ、奨励しているといえよう。

（５）マッカにおける迫害の激化、逃亡の切迫化とマディーナへの移住（聖遷：ヒジュラ）

ムハンマドの伯父は、クライシュ族の一部族・ハーシム家の族長であった。彼は、イスラームの信者とはならなかったが、ムハンマドを庇護する宣言を出していたため、ムハンマドに身の危険はなかった。しかし、この伯父が亡くなると、イスラームの教えに反発していた次の族長が庇護宣言を取り消したため、ムハンマドの命が危険に晒された。同じ年に、かけがえのない理解者であったハディージャも世を去った。

イスラームの秘密の布教時期に信者になったのは、３０人ほどであった。その後、10 年の間に信者の数は 200 人ほど増えていたが、1 万人のマッカの人口に比べるとごく少数だった。だが信者にならない者にも、ムハンマドの説く世の中のあり方と、あまりに違うマッカの状況は、忌避すべきものと考える人々が増えてきて、マッカの支配層にとっては、放置してはおけなかった。

ムハンマドが庇護の対象から外れたことで、ついに、ムハンマドの暗殺が企てられた。このため、ムハンマドたちはマッカの北方約 300ｋｍにあるマディーナ（＊）に逃れる決意をした。多くの書籍には、『マディーナに移住した』という表現がよく見られる。これは、このときの行動が、後にイスラームの人びとによって、ヒジュラ（アラビア語で、移住という意味。日本では、特別な移住という意味をこめて、聖遷という表現をする）と、呼ばれるからであるが、実際には、生きながらえるための『逃亡』という表現が相応しいほど、切迫したものだった。ただ、普通の意味の逃亡と異なるのは、マディーナの人びとから、そこに来ることを要望されていたことである。

マッカからの脱出は、少人数づつで、目立たぬように行われた。殆どの者を逃したあとに、ムハンマドと共にマディーナへの旅に同行したのは、友人のアブー・バクル（ムハンマドの死後、最初の正統カリフとなる）だけであった。

（＊）注：マディーナは、当時、ヤスリブと呼ばれていた。なおマディーナとは、アラブ語で、“町”という意味の普通名詞である。ヤスリブの、後の正式名称は“預言者のマディーナ”となったが、やがて、マディーナとだけいえば、この町を指すことになった。
マディーナは、マッカと異なり農業を行える水量の泉を有していたため、農業で生計をたてていた。

彼らは、追っ手を逃れるために、マッカとマディーナを結ぶ通常の路ではない道筋を進まざるを得ず(p18 の地図参照)、この逃避行は辛いものであった。ムハンマドは既に 53 歳で、40 歳くらいが平均寿命の当時としては老境であった。マッカは生まれ育った土地であり、また、古の一神教のあったと伝えられる土地であり、特別なものであった。マッカに再び戻れる見通しもなく、マディーナでの生計の立て方のあてもないこの旅立ちは、不安に満ちていたことだろう。

ムハンマドがマディーナに移ったのは、かねてから、マディーナの中にイスラームを信奉する者たちがいて、彼らを通して、ムハンマドの人柄が伝えられており、マディーナの人びとが自分たちの苦境を救うために、マディーナの長となって欲しいと要望したためである。　当時のマディーナは、対立する 2 部族があり、勢力は均衡していた。一族の誰かが傷つけられると、部族の誇りにかけて報復せねばならず、対立する 2 部族の勢力が均衡していたため、血みどろの報復合戦が繰りかえされた。今や、マディーナの社会そのものが、存続を危ぶまれる事態となっており、そういう状態でこの２部族が、ムハンマドに指導者となるよう依頼したと考えられている。

マディーナへの逃亡以前に、ムハンマドは近くのターイフの町を候補に選び、そこに移ろうとしたが、ターイフの住民から厳しく拒絶されていたから、マディーナの住民がムハンマドを招致したことは、ムハンマドたちにとって、有難いことであった。

それ以上に、マディーナがムハンマドを招致したことは、イスラームにとって幸運であった。マディーナは、マッカからは、かなり離れて（直線距離で 310ｋｍ）いたし、そのうえ住民の数も、マッカには到底及ばないとしても、そこそこの数はいたと思われる。（当時のマッカの人口約１万人に対して、マディーナの人口について具体的な数を記した図書を見つけられていないが、マディーナへの移住後しばらくして、ムハンマドがマッカの隊商を襲うための部隊を仕立てた時、“マッカからの移住者７４名を含めて３００名の部隊を作ることができた“ということが知られていること、また、マディーナには、多神教信仰の部族以外にも、“ユダヤ教徒（ユダヤ人なのか、ユダヤ教を信じるアラブ人なのか不明）が３部族いた“　との記述が「興亡の世界史：第６巻：イスラーム帝国のジハード」の p108 にあること、数において遥かに劣勢ながらマッカ軍との戦いを何度も行っていること、などから、それなりの人口は有していたと推定される。）

こうした規模の町で、ふたつの、力の均衡した部族が諍いを繰り返し、それが収拾がつかないほど激化して、外部の誰かに助けを求めざるを得ない状況に至った、ということは稀な事態であって、イスラームにとっては、この上ない幸運であった。この幸運がなければ、イスラームは、生じてすぐに滅亡していた可能性が高かったと思われる。（マッカにおいては、クライシュ族が圧倒的に優勢であり、ふたつの部族間の抗争による消耗という事態は生じなかった。）

ムハンマドがマディーナに移った時点で、マディーナの住民でイスラームを信仰する者はごく少数であり、住民の大多数は多神教を信じていた。だが、マディーナの民は、マディーナ内でイスラームの民を守ることを約束した。
後になって、ムハンマドがマッカからマディーナへ移ったことを聖遷（ヒジュラ）と称し、この年がイスラームの始まりの年とされる（イスラーム紀元元年。西暦でいうと 622 年）。

イスラームの信者の一部は、このとき、今のエチオピアの地にあったキリスト教のアクスム王国に逃れた。アクスムは、マッカと通商関係にあったが、後にマッカとマディーナが本格的に戦争状態に入ったとき、イスラームの人びとを引き渡せというマッカの要求を拒んで、庇護を続けた。イスラームは、長くこのことを感謝し、後に、イスラームが紅海とナイル川の支配権を握った後も、アクスムに侵攻しなかった。

（６）マディーナにおける共同体（ウンマ）の結成

マディーナにおいて、ムハンマドの始めた重要な事柄のひとつが、イスラームの共同体（ウンマ）を作ったことである。
それまで、アラビア半島の人々は部族という集団で纏まりを作ってきた。部族は原則として血族者から成るものであり、ひとは生まれた時から、どの部族集団に所属するか、決まっていた。

これに対し、ムハンマドの始めた共同体(ウンマ)は、生まれた時に決まっているのではなく、各人がイスラームという宗教に帰依することによって、共同体に所属することが決まるもので、これまでの血族集団とは全く異なるものであった。ムハンマドがマディーナで始めた共同体には、マッカから逃れてきた人たち、マディーナにおいて新たに信者となった者たち、あるいは、アラビア人以外の人でイスラームに帰依した人たちが、部族や人種の違いを超えて所属し、ひとつの組織として機能するものであった。

部族という集団は、たかだか数百人の規模のものにしかならない。だが、共同体ならばその数に制限はない。共同体（ウンマ）という形態において、アラビア半島の人々は、それまでにない大規模集団として纏まりをもつ可能性が生じたことになり、後にイスラーム社会が世界史を揺るがす程に大きくなるきっかけとなったとも、考えられる。

共同体という概念は、イスラームの人びとの日々の生活にとって、極めて重要な意味を持っている。共同体があれば、その中でイスラームの人たちは協力しあい、役割を分担しあって生活していける。ある意味では、国家は不要である。実際に、ムハンマドの生存中も、ムハンマドの死去後、４代続いた正統カリフ時代にも、イスラームの人びとは、国家という概念の中に生きていたわけではなく、共同体の中で生きていたといえる。
正統カリフ時代には、その領域は、もはや小さなものではなく、ムハンマドが共同体を始めたときの、マディーナというごく限られた領域を遥かに超えた広大な地域になっていた。第２代の正統カリフ・ウマルの時代には、下図の緑色の部分を勢力圏内に収めていた。ウマルは､644 年に死亡しているから、ムハンマドが 622 年にマディーナに逃れてから、わずか 22 年後には、東ローマ帝国、サーサーン朝という強大な敵との戦いに勝って、このような広大な地域を支配していた。「大征服は、歴史上の奇跡のひとつ」という説明は、納得できる。
だが、このように広大な地域を支配下に置いてもなお、当時は、共同体という組織にイスラームの人々は所属していたのである。

第２代正統カリフのウマルの時代にイスラームの支配下にはいっていた地域
（緑色）

なお、4 代続いた正統カリフ時代のあと、ウマイア家がイスラームの支配権を握ると、カリフは共同体の合議で決められるのではなく、ウマイア家の世襲になり、これは、統治形態としては、もはや、共同体というより、王朝ないしは、帝国という名の国家になった。
しかし、その後、長く続くイスラームの各王朝のもとでも、共同体（ウンマ）という概念は、今日に至るまで、イスラームの根幹のひとつをなしていると考えられる。

なお、マディーナに逃れてきた直後に、ムハンマドは、そこの住人（多神教の信奉者、ユダヤ教徒、キリスト教徒たち）と、互いに協力していくための約束を取りかわしている。これは、マディーナ憲章と呼ばれている。
ムハンマドは、対立する2部族の仲裁者の役割を果たしながら、イスラームの布教を行い、また時に神の啓示を受け続けた。マディーナにおいて、イスラームを信じる人々の数が次第に増えていった。

（７）“剣のジハード”の開始

イスラームのジハードとは、そもそも内面的なものである。すなわち、イスラームの教えにそぐわないことをしないように自分を律すること、自分を取り巻く社会が公正なものであるように奮闘することを意味するのであり、武力とは無縁である。
マッカで布教をしていたときに、ムハンマドは、いかなる武力も用いていない。

だが、マディーナに移って程ない頃、ムハンマドは、イスラームを守るために必要な場合に、武力を用いた戦い（剣のジハード）の許可を、神の啓示として与えられ、それをイスラームの民に知らせた。こうして、武力でイスラームを守る権利が神から与えられたことになった。

この“剣のジハード”は、当初は、マッカのクライシュ族の攻撃からイスラームを守るためのものであった。だが、後にマッカを手中に収めたあとは、アラビア半島内の敵対する勢力からイスラームを守るために使われた。その後は、サーサーン朝と東ローマ帝国からイスラームを守るための戦い、後代のイスラームの歴史家から、「大征服」と名付けられたイスラームの急激な版図拡大事業にも、イスラームを守るために“剣のジハード”は用いられ続けた。
つまり、「イスラームを守るため」という大義は、イスラームと対峙した集団から見れば、イスラームによる侵略にほかならず、それは、歴史上、全ての侵略戦争が「自国を守るため」という説明ができることと同じである。

繰り返しになるが、”ジハード”という言葉の本来の意味は、内面的なもので、武力とは無縁であることは、理解しておかねばならない。
また、イスラームの急激な領土拡大は、「片手にクルアーン、片手に剣、というイスラームへの改宗を強迫的に伴うものであった」、という説明は誤りである。この説明は、キリスト教徒が恣意的に流布させ、日本にもそのままヨーロッパから導入された。
しかし、実際に、イスラームは征服地においてイスラームへの改宗を強制しなかった。納税の面などで不利益はあるものの、キリスト教徒、ユダヤ教徒など、いずれも、自分の信教を保持できたのである。
イスラームが征服した地の大半で、イスラームへの改宗は、おおむね200～300年をかけて、ゆっくり行われた。中東では、いったん、イスラームへ改宗した人々は、たとえ、その後、ヨーロッパ列強の植民地になった場合でも、キリスト教への改宗は殆ど行われていない。

（一方、キリスト教徒が征服した土地の多くでは、改宗が強制された。
例として、“イベリア半島をキリスト教徒が奪い返した”と説明されることの多い1492年のレコンキスタ運動の終了後、イスラームの人々だけではなく、それまで、ともかくも共存していたユダヤ教徒の殆どが、改宗を拒んだために、イベリア半島から放逐された。

そもそも、スペインのレコンキスタ運動について、“キリスト教徒がイスラームに奪われた祖国の地を取り戻した正当な行為“という単純な捉え方は、キリスト教徒からの偏った見方というほかない。　レコンキスタの結果、多くの住民を追い出したという以外に、近年では、「レコンキスタ完成により、スペインは多様性が失われ、偏狭なカトリックが支配し、魔女狩りなどの行われる窮屈な国になってしまった。」という評価が見られる。
1898 年グラナダ生まれで、当時のスペイン最高の詩人と言われたフェデリーコ・ガルシア・ロルカ（＊）は、次のように語っている。（＊1936 年に、多くのグラナダの人々と共に、フランコ支持派によって殺害された。）

「1492 年のフェルナンド王とイサベル女王によるグラナダ占領をどう考えるか、自分は、非常に不幸な事件だったと思うが、学校では、全く逆の評価を与えられて教えられている。グラナダの占領の結果、世界でも特異な素晴らしい文化、詩、天文学、建築、繊細な美が失われ、貧しい、おどおどした都市、今では、スペインの鼻もちならないブルジョアジーが跋扈するつまらない土地に変わってしまった。」　　）

レコンキスタを日本語ではよく「国土回復運動」と表現するが、これはキリスト教側の動きを正当化してしまう誤った表現だと思う。スペイン語の表現そのままに、「再征服運動」という表記に変更すべきと思われる。

（８）ムハンマドの統治能力の発揮

先に記したように、ムハンマドには幼少期から青年期はもとより、40 歳に至るまで、とりたてて人目を引くような才能を示したという事跡は伝えられていない。

その彼が、イスラームを始めてから、まず用心深く、周囲の者たちの改宗を進め、やがて、イスラームの教えを公開してからは、徐々に数を増やしながら、集団を統括していっている。ついには、マディーナから町を救うための長として招聘されるまでになったのだから、統治能力あるいは政治的能力は、このころから、ムハンマドの中に高まっていったのだろう。

マッカを追われマディーナに移ってから、さらに粘り強く、政治力あるいは統治力とでもいうべき驚異的な能力を発揮している。
それは、イスラームを始めるまでのムハンマドについて言われてきた「誠実で、嘘をつくことなど、ありえない人物」という評価から、およそかけ離れているように思える。
ムハンマドは何らの神性も有しておらず、神の言葉を伝えるために選ばれた者ということだが、いったん選ばれた後は、それまでのムハンマドと異なり、いわば人が変わったように、驚異的な能力を発揮しているように見える。この、粘り強い、驚異的な能力があってこそ、イスラームは、初期の幾多の危機を乗り越えて生き続け、発展していった。我々からみると、そのようなことの実現は理解しがたいことであるが、イスラームの人びとにとっては、神のなせる業、ということになるのだろうか？

ムハンマドが発揮した統治能力の最初の例が、マディーナに以前から住んでいた多神教の信者やユダヤ教徒など多くの人々と、イスラームの人々が共に暮らしていくための”マディーナ憲章”であり、共同体（ウンマ）の創出であるといえよう。

（９）跪拝の方向の変更

イスラームの最初の頃の跪拝の方向は、エルサレムを向いて行うものであった。
これは、彼らの信ずる神がユダヤ教の信じる神と同一であって、エブラハムが息子イサクを犠牲にしようとした聖なる岩があったため、という説がある。

マディーナに移って１～2 年後、ムハンマドが受けた啓示によって、跪拝の方向はマッカのカーバ神殿に変更された。（当時のカーバ神殿には、まだ多数の神々の偶像が祀られていたにもかかわらず。）

(10) バドゥルの戦い：イスラームにとって、最初の記念碑的勝利の戦い

クライシュ族との戦いは、もはや避けられなかったし、また、マッカにおける商業の営みの道を断たれた以上、マディーナに逃れてきた信者たちの生きる道は、事実上、当時の常套とう手段である隊商の襲撃・略奪しか、なかった。移住から 2 年後、ラクダ 1000 頭というマッカの大きな隊商が、シリアから戻るという情報を得たムハンマドは、隊商を襲うための部隊を組織して、マディーナを出発した。総勢 300 人のうち、74 名がマッカから移住してきた者たちだった。彼らにはラクダが 70 頭しかなく、3 人で一頭のラクダに交互に乗っていくしかなかった。
マッカの隊商は、マディーナの西、紅海に近いバドゥルの水場を通るはずであった。ここに先遣隊を送ったムハンマドは、水場の周辺の住民から、大きな隊商が 2 日後にそこに到着するという情報を入手した。

マッカの隊商の指揮者アブー・スフヤーンは、慎重で有能な人物であった。彼は用心のため、自ら隊商に先行してバドゥルの水場を訪れ、ムハンマドの先遣隊がそこで情報を仕入れたことを知ると、バドゥルの水場を通らない道を選択し、同時に、マッカに対してムハンマド軍の襲撃の可能性を急告させた。その結果、マッカから 1000 名の軍隊がバドゥルの水場に向かった。

左の図は、ムハンマドがマディーナに逃れてから、マッカ凱旋を果たすまでの主要な出来事の場所を示している。

・622 年のヒジュラの道は、マッカからの追跡をかわすために、通常の道から外れている。

・624 年のバドルの戦い、625 年のウフドの戦い、627 年の塹壕の戦いは、マッカとの主要な戦いであった。

・628 年に、フダイビーヤで結ばれた和議は、ムハンマドの巧みな政治駆け引きの勝利であり、マッカへの凱旋に繋がった。

ムハンマドたちは、厳しい選択を強いられることになった。当初の、大きな隊商を襲って金品を奪うという目標の達成は、もはや不可能だった。マッカからの軍勢は、自軍の 3 倍の 1000 名にも上り、そのうえ、装備も遥かに優秀だった。ここは戦いを避けてマディーナに戻る、という案も考えられたが、そうすると、今後、いつマディーナそのものが、マッカの軍勢に攻められるかわからない。

ムハンマドの指揮下の 74 名のマッカからの移住者の意思は、ここで戦う方針に一致した。だが、元からのマディーナ在住の者たちは、どうするか？　彼らはマディーナ内ではイスラームを守る誓約・マディーナ憲章を交わしたが、ここはマディーナの外で、しかも相手の勢力は 3 倍である。このとき、マディーナからの軍の代表として、サアド・イブン・ムアーズが立ち上がり、ムハンマドに向かって告げた。
「我らはあなたを信じ、あなたがもたらしたものを真実と証言し、忠誠を誓いました。
　アッラーの使徒よ、お望みのまま進んでください。われらは共にありましょう。」

ムハンマドはマディーナの民の協力を感謝し、バドゥルの水場に向かった。そのとき、マディーナの民から、「大きな水飲み場を占拠し、他は埋めるべきだ」と、進言され、従った。これは、戦いの当日、大きな意味を持った。

マッカ軍は、待ち構えるマディーナ軍に遅れてバドゥルの水場に到着した。沙漠での行進は夜しか行えないので、彼らは明け方到着したが、太陽の日差しを浴びる側に布陣するしかなかった。それでも、対するマディーナ軍は少数で装備も貧弱なのがわかり、マッカ軍は勝利を確信した。
戦いは、当時の慣例どおり、3 人ずつの戦士が相手と一騎打ちを行うことから始まった。マディーナ側からは、マッカからの移住者の中から 3 人が選ばれたが、彼らはマッカ軍の代表者をいずれも打ち破り、マディーナ側の戦意があがり、マッカ側にはとまどいが走った。

本格的な戦いが始まった。ムハンマドは、歩兵・弓兵を横に並べる戦術をとったが、これはアラブでは初めてのものだった。マディーナ側は、大量の矢でマッカ軍を攻め、時には陣形をしっかり組んだ歩兵が突入を繰り返し、ついに勝利を得た。マディーナ側は、次々と水の補給ができたのに、マッカ側は全くできなかったことも、戦いの帰趨を決めた要因とされる。　　マディーナ側の戦死者 14 名に対し、マッカ側は戦死者 50 名、捕虜は５０～７０名とされ、大将のアブー・ジャフルも死んだ。

この戦いは、かなり不利な状況から大きな勝利をえたもので、イスラームにとっては、神が自分たちの側にいることの大きな証となった。画期的な勝利であり、この戦闘に参加した全ての者たちが、永く、その名を称えられている。

この戦いにおいても、その後の戦いにおいても、ムハンマドが決定した戦術の多くが、成功している。ムハンマド自身は、“剣のジハード”を始めるまで、武力に慣れていたようには伝えられていない。バドゥルの戦いにおいて、ムハンマドは、自分たちの使う以外の井戸は埋めてしまうなど、他の者たちの助言を受け入れるという方針はうかがえるし、歩兵・弓兵を横に並べるというアラブでは初めての戦術も、誰かの助言であり、ムハンマドが柔軟にそれを採用したのだろう。

バドゥルの戦いの結果、イスラームの民の結束が固まったことはもちろんだが、マディーナの住民の間に、マッカからの移住者に懐疑的な人々は少なくなり、また、捕虜の身代金によって、マッカからの移住者の生活の困窮も緩和された。

だが、マッカのクライシュ族は、なおも強力であり、イスラームの殆どの人にとって、自分たちが、マッカ軍を破り、マッカに凱旋する日が来る、などという予想は難しかったであろう。

(11) ウフドの戦い　（イスラームが敗北した戦い）
マッカのクライシュ族の主だった人々は、武器を取っての戦いになれば、イスラームの人々は全く問題にもならないと考えていたが、バドゥルの戦いにおいて、3倍の兵力を有しながら敗北を喫したことは大きな痛手であった。それは、クライシュ族の信用そのものを低下させたため、放置できないことであった。また、戦死者の遺族にとっては、復讐が果たされなければならなかった。当時のアラビア半島の住民にとって、復讐を果たすことは、高い優先性をもっていた。

バドゥルの敗戦の翌年、マッカは3000人の軍隊をマディーナ攻略に派遣した。指揮者は先年、シリアからの隊商を率いていたアブー・スフヤーンであった。彼らは、マディーナの近くのウフド山の麓に陣を構え、マディーナ周辺の麦畑をラクダと馬に食い荒らさせた。農業で生計をたてていたマディーナにとっては、これは痛い打撃であった。マディーナ内では、堅固な城砦を頼りに籠城すべきとする意見と、出撃すべきという意見に分かれた。ムハンマドは籠城を主張したが、結局、出撃に決まった。
ムハンマドは、1000人の軍勢を率いて出陣したが、直後に、よそ者のムハンマドが指揮をとることを快く思わない300名の部隊が離脱してしまった。

マディーナの人びとは、ウフド山を詳細まで知っており、残った700人の軍勢は、夜陰に乗じてウフド山の高い位置に陣取ることができ、これによって、下のマッカ軍より、場所としては優位になった。ムハンマドは、50人の弓隊を選び、彼らに「諸君らは高いところにいるのだから、矢の効果は強く、敵の弓兵からの矢の威力は届かない。たとえ我が軍が負け始めても、持ち場を離れず、敵兵に矢を射続けよ。また、たとえ我が軍が勝利し、戦利品を奪い始めても，決して持ち場を離れてはならない」と、指示した。結果として、この指示が守られず、マディーナ軍は敗れることになる。

戦いが始まると、上のほうに位置するマディーナ軍は弓隊の効果が大きく、その影響で剣や槍を交えての戦いでも優位に立つことができた。ムハンマドの叔父のハムザが戦死するなどの被害は出たものの、戦いはマディーナ軍がマッカ軍をじりじりと下に押しやる形で推移し、マッカ軍が勝利を収めるかに見えた。だが、この段階で、マディーナ軍の一部が戦利品を奪い始めるのを見たマディーナ軍の弓隊の多くが、指揮官の制止にも我慢できずに、自分たちも略奪にあずかるべく、持ち場から降りてきて、戦利品を獲得し始めた。これは、当時のアラビア半島の戦いの褒賞の仕組みが、自分が直接手に入れた戦利品が基本的に自分のものになるという、軍全体としては統率の取れない仕組みであったためである。　マディーナ軍の弓隊の乱れを見逃さなかったのが、マッカ軍の左翼の指揮官・ハーリドであった。彼は、マディーナ軍の弓隊の場所を襲い、そこを占領して、マッカ軍に襲いかかった。

マディーナ軍は4倍の数の敵軍に包囲された。必死に味方を鼓舞しながら戦ったムハンマド自身も、帷子かたびら　の上から肩に剣を撃ち込まれ、倒れた。ムハンマドが倒れるのを見たマッカ軍は、彼が死んだと考え、「ムハンマドは死んだ」と触れ回り、マディーナ側は戦意を喪失し、マッカ側は目的を果たしたと考え、剣を収めた。

結果的に、ムハンマドはウフド山の上のほうに逃れ、生き延びた。マッカ軍の指揮者・アブー・スフヤーンは、ムハンマドがまだ生きていることを知ったが、戦いには勝利したので、マッカに戻った。この戦いは、マディーナ軍の戦死者は約75名、マッカ軍の戦死者がわずか20名程度で、マディーナにとっては、大きな敗北であった。だが、このときに、負傷したムハンマドが追い詰められ、命を絶たれなかったことは、イスラームにとって、このうえない僥倖だった。

（注：戦死者の割合について：
ムハンマド側の軍勢総数700名のうち戦死者が75名で、それで“大きな敗北“ということが、若干、腑に落ちないと感じたので、調べた結果を以下に記す。
一般に、戦死者の3～5倍の、戦傷がもとで戦力にならない負傷者がいるという実態が重要で、戦死者が1割に達すれば、全体の戦力は、ほぼ半減してしまう。これでは、相手側にかなりの人員損失がないかぎり、戦いを続けることはできず大敗北になる、ということらしい。

“軍勢総数700名のうち戦死者が75名で大敗北”という記述を読んだときに違和感を覚えた理由は、歴史上、有名な戦いであるカンナエの戦いが記憶にあったためである。BC216年、南イタリアのカンナエにおいて、カルタゴ軍５万人が、ハンニバルの巧みな作戦によって、８万人を擁するローマ軍を包囲・殲滅し、ローマ側は5万人の戦死者、1万人の捕虜を出して完敗した。カルタゴ軍の戦死者は5000人と伝えられており、カルタゴ軍の圧勝であった。
ほぼ1年前に、北イタリアのトラシメネス湖畔の戦いで、ローマ軍は戦死者15000名（カルタゴ軍の戦死者1500～2000名の約10倍）という厳しい敗戦をハンニバルに喫していたが、そのときには、湖と丘陵の間の狭い道を行進中に、霧で見えなかった側面に潜んでいたカルタゴ軍に一斉に攻撃され、惨敗を喫していたから、カンナエでは、ローマ軍は用心していた。
カンナエの戦いは、トラシメネス湖畔の戦いとは異なり、見晴らしもよく、互いに相手の布陣がそれなりに見える筈の戦場であったのに、ハンニバルの巧みな用兵により、数で勝っていたローマ軍が少ない数のカルタゴ軍に包囲され殲滅されたもので、この戦いは、近年まで、各国の軍の将校にとって、戦術を学ぶための格好の例として、教練の必須の材料であった。

このカンナエの戦いで夥しい戦死者数が出たという記憶が強かったため、１割程度の戦死者数で大敗北、という記述が納得できなかったのだが、カンナエの戦いの戦死者数は、例外的なものらしい。

本格的な戦争で、戦死者が一割に満たない例として、1402年、当時、隆盛を誇っていたオスマン朝が、新星のごとく現れたチムール軍に敗れた

アンカラの戦いがある。双方の兵力の勢数が合わせて 30 万人を超えると推定されているのに対し、戦死者数は“15000 人以上だった”と記述されいるが、仮に 2 倍としても、１割程度である。アンカラの戦いは、異民族間の戦いであって、互いに、戦死者の数をあまり多くしたくないと配慮する戦いではなかったが（実際に、オスマン朝は、皇帝が捕虜になり、数か月後、捕虜のまま死去し、一時、滅亡寸前になるほどの決定的な敗戦であった）、それでも戦死者の数は１割に満たなかったということである。

日本の戦国武将同士の戦いでは、しばしば、戦いの後のことを考えて、互いに戦死者の数を多くしないうちに、戦いを終えたという。
第 4 次の川中島の合戦（山本勘助の“キツツキ作戦”の戦い）は例外で、このときは、両軍が正面からぶつかり合うという稀な戦になったため、双方とも、それぞれの約２割もの戦死者を出す結末になった。　　）

（12）塹壕の戦い　（戦いの勝敗はつかなかったが、結果としてイスラームが優位に）

ウフドの戦いで敗北を喫した後、マディーナに戻ったムハンマドは、出撃直後に 300 人もの兵が離脱するという事態になったことを深く反省した。これは、マディーナ内の結束の弱さを露呈したもので、その対応として、共同体内部の絆を強め、マディーナ社会の安定化に努力した。

ウフドの戦いの勝利にも関わらず、徹底的な勝利を収められなかったマッカ側は、イスラームを滅亡させるため、アラビア半島の諸部族との同盟など、持てる力を総動員してマディーナに軍を向かわせた。軍の総数は 10,000 名を超えた。
ウフドで敗北を喫したマディーナ側は、今度は慎重に準備を進めた。マディーナは堅固な城砦に囲まれているので籠城戦を選び、唯一城砦のない北側に塹壕を掘った。これは、ペルシャ出身の信徒サルマーンの進言を受けたものである。当時イスラームには既にアラブ人以外の民族が信徒として存在し、重用されていたことがわかる。アラブの戦史で塹壕が用いられたのは、この戦いが始めであった。塹壕が有効に働いて、数において劣勢のマディーナ側が負けなかったので、この戦いは、後に“塹壕の戦い”と呼ばれた（もしくは、“部族連合の襲来”とも呼ばれる）。

マディーナ側は、前回の反省から、マディーナ周辺の畑は早めに収穫を終えてマッカ軍を待ち受けた。
マッカ軍は、城砦のない北側から攻めたが、塹壕のために得意の騎馬による戦いを封じられた。　歩兵戦ではマディーナ側の士気高い兵士たちが優位に立ったものの、10,000 名ものマッカの大軍は、マディーナの人びとにとっては脅威だった。だが、ウフドの戦いのときと異なって、彼らはムハンマドの指示をよく守り、ひたすら、この脅威に耐えた。

どちらにも決定的な戦果がないまま、2 週間が過ぎた。マディーナ側は、生死をかけた戦いで必死だったが、包囲する部族連合の多くは、マッカのクライシュ族に誘われ、戦利品目当ての寄せ集まりでしかなかった。そのため、2 週間が過ぎると、包囲している部族連合軍は戦意を維持できず、なしくずしに軍が解体してしまい、各部族は、それぞれの地に戻った。部族連合軍を呼び掛けたマッカ軍も引き上げるしかなく、戦闘の勝敗はつかなかったものの、この戦いは明らかにマディーナ側の勝利となった。

アラビア半島におけるマッカのクライシュ族の権威失墜は、著しいものになった。
反対に、唯一神を信奉し、神の前での万民の平等を訴えるイスラームの勢いが、
増していった。

(13) マッカへの凱旋

１）フダイビーヤの和議
塹壕の戦いの翌年、ムハンマドは信徒たちにマッカへ巡礼をすることを告げて旅の
準備をさせた。この月は、マッカにとって神聖月であり、マッカのカアバ神殿を
訪れる者は、誰でも受け入れる伝統になってはいたが、マディーナとマッカは戦争
状態が続いており、信徒の多くは武装していくべきと考えた。だが、ムハンマドは、
犠牲に捧げる家畜だけを連れていく、と厳命した。

ムハンマドの行為は、マッカ側を深刻なジレンマに陥れた。ムハンマドたちの巡礼を
武力によって妨害すれば、マッカの神聖月の伝統を毀したとして、アラビア半島中の
非難を浴びるし、かといって、巡礼を許せば、クライシュ族はイスラームに屈したと
みなされるかもしれない。
ムハンマドたちがマッカの領域に接するフダイビーヤの地に到達したとき、クライ
シュ族は、そこから領域内に入れる決心も、武力に訴える決心もつかないまま、ムハ
ンマドたちにその場に留まるように要請した。さまざまな駆け引きが行われた後、
ムハンマドの提案で和議が結ばれた。この和議は、場所にちなんでフダイビーヤの
和議と呼ばれる。
この中で、クライシュ族とムハンマドたちは、１０年間の平和条約を結んだが、イス
ラーム側の殆どの者にとっては不満であった。その理由は、ムハンマドが「アッラー
の信徒」として署名することを許されず、単にアブドゥラーの息子・ムハンマドと
しか署名できなかったことであり、さらに、マッカとマディーナの双方の民が互いの
地を訪れるときの条項が、マッカ側に有利なものであったからである。そのうえ、
ムハンマドたちは、そのときはマッカへの巡礼をやめ、マディーナに戻ることになった。

だが、イスラームの人びとが不満を示したこの和議は、やがて、大きな効力を発揮して、
マッカの無血開城へと導いていった。このことは、ムハンマドだけが確信していた
ことかもしれない。

２）マッカへの巡礼による勢力の誇示
翌年、ムハンマドは、3000 名もの大勢によるマッカへの巡礼を行った。和議に従って
クライシュ族は 3 日間にわたってマッカの隣接地に移った。
カアバ神殿には、多神教の偶像が多数祀られたままだったが、それに構わず、ムハン
マドたちは、カアバ神殿の上からイスラームの祈りの呼びかけ（アザーン）を行い、
アッラーに礼拝を捧げ、神殿の周りを 7 周するタワーフ（周回）の行を自由に行った。
イスラームは、大挙してマッカの地に自由に入り、みずからの信仰の行をおこなう
ことができたのである。これは、イスラームの勢力伸長を明白に示すものであった。

３）ハーリド・イブン・ワリードのイスラームへの改宗
フダイビーヤの和議のあと、マッカの住民の中からイスラームへ改宗する人が増えて
きた。ハーリドは、マッカの著名な武将であった。彼は、イスラームが厳しい敗戦を

喫したウフドの戦いにおけるマッカ側の指揮官のひとりで、イスラーム軍の乱れを鋭く突いて、マッカ軍の勝利を導いた有能な将軍であった。その彼が、マディーナを訪れイスラームへの改宗を申し出たことは、イスラームにとって歓迎すべきことであり、マッカにとっては打撃であった。ハーリドは、後に、シリアにおける東ローマ帝国との戦いにおいて、大きな軍功を挙げ、“アッラーの剣”と称されることになる。

４）ムウタにおける東ローマ帝国との最初の戦い：敗戦

シリアは、古来よりさまざまな文明が交流し、アラビア半島に比べて農産物も豊富で商業活動も活発な地である。若いころ、隊商の一員としてシリアに赴いた経験のあるムハンマドは、シリアの重要性をよく理解していた。
かつて、アラビア半島の北辺には、ガッサーン王国という、キリスト教を信奉するアラビア人の王国があった。ガッサーン王国は、東ローマ帝国に服属し、国境の守備隊的な役割を担っていた。ある時期には、かなり強勢を誇っていたが、サーサーン朝のシリア地方への攻勢に伴い、613 年には滅亡に近い状態になった。
東ローマ帝国は 10 年ほどサーサーン朝に対して防戦一方であったが、622 年には皇帝ヘラクレイオス指揮下に反撃に転じ、サーサーン朝の首都クテシフォンを脅かした。サーサーン朝では皇帝の息子が皇位を簒奪し、東ローマ帝国に和解を申し入れた。ヘラクレイオスは受け入れ、かつて奪われた聖十字架を取り戻して、エルサレムに凱旋した。

ムハンマドは、ガッサーン朝の滅亡後の同地域に、布教のための使者を送ったが、殺害されたため、事態を重く受け止めた彼は、629 年 9 月に 3000 名の軍隊を差し向けた。この中に、勇将として知られていたハーリドが含まれていたが、彼は、イスラームに改宗して間もない時であり、一兵士として参加していた。
このとき、ムハンマドの意図としては、軍を送ったのは、勢力を誇示するためであって、必ずしも、直ちに戦争を開始するつもりではなかったらしい。

左の図に、ムウタの場所が記されている。（ムハンマドが、ガッサーン朝に使者を送った理由は、講談社学術文庫「アラブの歴史（上）」（ヒッティ著）p292 によると、マッカ攻撃に備え、ガッサーン朝の支配地で生産される優れた剣を手に入れるためであった。）

だが、相手側は、ただちに東ローマ帝国に援助を求め、その結果、1 万人の東ローマ帝国軍が、イスラーム軍の前に現れた。　エルサレムの近くにあるムウタにおいて、両者は戦闘を開始したが、不意を突かれたイスラーム側の準備は、不十分であった。

イスラーム軍は、司令官が自ら前線で戦う事態になり、戦死してしまった。その後を託された司令官も戦死し、次の司令官も戦死した。ここに至って、一兵士として戦いに参加していたハーリドが、司令官の役割を委ねられた。彼は、いくつかの局部戦で鋭く敵軍を攻撃しながら、全体として巧みに後退を行い、ついに戦場から多くの兵を離脱させ、マディーナに戻った。ムハンマドは、戦いが敗北した後の困難な撤退戦を巧みに指揮したハーリドを称え、“アッラーの剣”という名を与えた。

ムウタの戦いは、明らかにイスラーム側の厳しい敗北であった。いくつかの資料には、イスラーム軍が“殲滅された”と、記されているが、仮に、兵の殆どの戦力を失うほどの敗北であったならば、それから１年足らず後に、マッカ進軍を１万人もの軍勢で行うことは不可能であっただろう。また、ハーリドは、この戦いの対応をムハンマドから称賛され、“アッラーの剣”という称号を与えられたほどであるから、戦いそのもは、一方的な敗北であったにしても、かなりの兵士が帰還できたのではないかと推定されるので、殲滅という表現には、違和感がある。

ハーリドは、この後、アラビア半島統一、サーサーン朝、東ローマ帝国との戦いにおいて、”アッラーの剣“という名前にふさわしい重要な戦果をあげていく。

５）マッカへの凱旋

フダイビーヤの和議の２年後、マッカ側に和議に違反する武力行使事件が発生した。事件自体は、さして大きなものではなかったが、ムハンマドはこれを好機と捉えた。危機に瀕した和議を結びなおすため、クライシュ族の長となっていたアブー・スフヤーンは、マディーナを訪れた。アブー・スフヤーンの娘たちは、イスラームに改宗してマディーナに住んでいたが、期待していた彼女らからの支援も得られず、何らの成果も得ないまま、彼はマッカに引き返すしかなかった。

ヒジュラ歴 9 年（西暦 630 年）、ムハンマドにとって、ついにその時が来た。ムハンマドは１万人の軍勢を引き連れて、マッカに向かった。マッカに近づいた夜半、彼は全員に松明をかかげさせた。マッカの人びとからは、ムハンマドの軍隊が夥しい数に見えた。

アブー・スフヤーンはムハンマドの陣営を訪れ、そこにアラビア半島の多くの部族が加わっているのを見た。最近までマッカに与くみしてイスラームと戦っていた部族も、かつてクライシュ族が一度も影響を及ぼし得なかった遠くの部族も含まれていた。クライシュ族の勇将ハーリドもいた。　アブー・スフヤーンは、もはや抵抗の意味がないことを悟った。ついに、彼は、「アッラーのほかに神なし、ムハンマドはアッラーの使徒なり」と言った。

ムハンマドは全軍を４隊に分け、マッカの四方から入城させた。ほとんど何の抵抗もなく、ムハンマドはマッカを制圧した。ときに、西暦 630 年、命を狙われて、やむなく、不安のうちにマッカを離れてから、8 年後のことだった。

ムハンマドはカアバ神殿に入り、全ての偶像を破壊もしくは焼却した。マッカの人びとの多くがイスラームに改宗したが、改宗しなくても安全は保障された。

（以下は、個人的考察）
クライシュ族の、一戦も交えない降伏は、執拗にムハンマドを排除しようとしていた集団の行動としては、あまりにも潔い、あるいは、不甲斐ないというようにも見える。

だが、有能なアブー・スフヤーンの立場からみれば、この局面でイスラームに戦いを挑むことは、無駄な血を流すだけではなく、クライシュ族の将来も閉ざす愚行と判断したのだろう。ムハンマドは、これまで、かつて激しく敵対してきた者でも、恭順の意を示せば、ことごとく受け入れている。そのため、この段階で、クライシュ族がイスラームに改宗すれば、そのままムハンマドの陣営に受け入れられ、もともと、有能なクライシュ族の多くの者が、イスラームの中核をなすことができると、判断したのではないだろうか。
事実は、そのように推移し、スフヤーンの息子ムアーヴィアは、ムハンマドの秘書のひとりとなり、次第にイスラームの中で重きを置かれるようになった。ついには、ウマイア朝を開き、全イスラームの統治者となった。

（１４） アラビア半島の統一

マッカ凱旋を果たしたのち、ムハンマドはマディーナに引き返し、引き続き、マディーナがイスラームの政治的な中心地であり続けた。
このとき、クライシュ族の多くも改宗したが、中にはマディーナに移住してイスラームによる統治機構に参画する者もいた。歴史家は、ムハンマドをはじめとしてマッカから移ってきた者たちを“移住者”、ムハンマドたちが移住する前からマディーナに住んでいる者たちを“援助者”と、呼んでいる。ムハンマドがマッカ凱旋を果たしたのちは、“移住者”の数が急に増え、“援助者”との間に或る種の緊張関係が生まれたが、ムハンマドの生存中は、さしたる問題は生じなかった。

ムハンマドがマッカ凱旋を果たした年は、「遣使の年」と呼ばれ、アラビア半島の諸部族が、次々と使節団をマディーナに派遣し、イスラームに参加した。こうして、アラビア半島は、史上初めて、ムハンマドの元に統一された、ということができる。その形は、国家としての統一というには、かなり緩やかなものであった。

（**フナインの戦い**
信頼できそうな図書には記されていないが、マッカ凱旋の直後に、フナインの戦いというものが発生したらしい。多数の神をまつるカアバ神殿は、マッカの住民のみではなくアラビア半島全体の多神教の信奉者にとっても、聖なる神殿であった。ムハンマドによって、彼らの崇ぁがめる偶像がすべて破壊されたことは、こうした者たちの怒りを買った。彼らは、カアバ神殿の奪取を画策し、12000人もの軍を集めた。フナインの深い峡谷において、イスラームの軍隊は敵の待ち伏せを受け、一時は退却の危機に陥ったが、彼らは預言者の元に集結し、怯ひるまず戦い続け、ついには勝利を得た。　　）

マッカに近接しているターイフの町は、かつてムハンマドを拒絶した経験があるが、ムハンマドがマッカを奪回した後、ターイフの住民もイスラームに改宗し、イスラームの中枢をなしていった。

３．ムハンマドの死去後の体制：正統カリフの時代

632 年、ムハンマドの死去によって、イスラームは、後に正統カリフ時代と呼ばれる新たな時代に入っていく。
ムハンマドは強い政治力を発揮したが、何よりも、彼は大天使を通じて神の意志を聞いた預言者であって、イスラームの人々にとって、偉大な求心力であった。ムハンマドが最後の預言者である以上、今後、危機にあたって、新たな神の啓示を受けることはできない。ムハンマドは死去の前に、「神からの啓示は全て与えられた」と宣言していた。

ムハンマドの死に伴う問題が山積する中で、イスラームは、人々の努力によって、さらなる拡大を続けていった。　　人々の努力があった、ということは、しかし、彼らが常に意見を集約して同じ方向を向いていたということではない。事実は、異なる意見が、時に武力による解決を試み、衝突が繰り返された。4 人の正統カリフのうち 3 人までが、同じイスラームの民に殺害されてカリフの地位を終えざるをえなかった、ということだけでも、激動の時代であったことが理解される。
これは、その後、幾度となく流血をもって繰り返された政治権力の争奪戦や、イスラーム各宗派間の争いの予兆でもあった。

ともあれ、この時代に、イスラームの領土、人口、財力などが急拡大し、それを制御するための仕組みが作られ、ウマイア朝、アッバース朝に続く基礎が作られた。また、クルアーンの正式版が定められたことも、貴重なできごとであった。

（１）初代正統カリフ　アブー・バクル
632 年、ムハンマドが死去した時が、イスラームの存続にとって最大の危機であった。アラビア半島を統一したのち、ムハンマドは、後継者の指名も、亡き後の体制も指示することなく急逝したため、イスラーム全体が混乱に陥った。
このとき、イスラームを纏めたのは、ムハンマドの友人のアブー・バクルである。彼は既に 60 歳であった。アブー・バクルは、マッカの裕福な商人であったが、思慮深い人物として知られ、ムハンマドの教えに接して直ぐに改宗し、以来、財産の全てを貧しい者の救済に費やしていた。アブー・バクルはイスラームのごく初期に入信しており、ムハンマドのマディーナへの逃避行・ヒジュラにも、唯一人、同行してきた人物で、“援助者”たちにも、最近イスラームに改宗したクライシュ族の者からも、信望があった。

１）ムハンマドの死去に伴う危機のひとつは、マディーナ内で発生した。ムハンマドの生存中に、既にクライシュ族の殆どの者はイスラームに改宗していたが、その多くの者が居住地をマッカからマディーナに変えていた。ムハンマドとともにマディーナに来ていた者たちを含む彼ら“移住者”と、ムハンマドたちが移住する前からマディーナに住んでいる者たち“援助者”との緊張関係は、ムハンマドが生存していた間は、問題を発生しなかったが、ムハンマドの死去後、“援助者”たちは、自分たちの今後の指導者を、“移住者”たちとは別に選ぶ、と宣言したのである。この宣言は、イスラームを二分することを意味した。

これに対して、アブー・バクルは、「イスラームの人びとは、ひとつに纏まらなければならない」という説得を、辛抱強く行った。ついに、これを“援助者”たちも受け入れ、ひとつめの危機は克服された。

２）リッダ戦争と呼ばれるふたつ目の危機は、アラビア半島の各地から起きていた。

アラビア半島は、イスラームを信じる者たちが多くなっていたが（大半というには、ほど遠かったようであるが）、彼らの多くは、ムハンマド死去の知らせを受けて、イスラームの教えについてマッカやマディーナから指示を受けるのではなく、自分たちの地域独自でイスラームの教えを守っていこうと考えたのである。

彼らの立場に立てば、彼らは、神の言葉を直接聞いた預言者ムハンマドを信じたのであり、ムハンマドが死去した今、預言者でもない人物の命令を受けるいわれはないと考えた。もともと、彼らは、マディーナにもマッカにも従属していたわけではなく、独立した対等な立場にあったのだ。彼らからみれば、自分たちの地域独自でイスラームの教えを守っていこうとするのは、自然なことであった。
彼らは、マディーナへの喜捨（ザカート）の支払いを拒否した。
アブー・バクルとマディーナの長老たちは、このような地方の動きを「リッダ（背教）」であるとみなした。各地方にとっては、はなはだ、心外な言い方であっただろう。

アブー・バクルは、「諸君らの誓いは、ムハンマドを通したものであったにせよ、彼個人に対してなされたのではなく、唯一神アッラーに対してなされたものである。ムハンマドは死んだが、諸君らが誓ったアッラーは今も存在している。それなのに、イスラームの絆を切ろうとするのは、背教である。」と、宣言した。

実際には、各地の離脱の理由はさまざまであった。中には、「新たな預言者が現れ、イスラームと類似の教えを説いたので、それに従う」という部族もあった。
もともと、イスラームには改宗していない部族もあった。
アブー・バクルたちは、各地の離反を放置しておけば、イスラームそのものの存続が危うくなると考え、断固とした対応を始めた。各地に、勇将ハーリド・イブン・ワリード他が兵を率いて進軍し、次々と戦いに挑み、着実に勝利をおさめていった。時に苦戦や敗戦があった場合も、必ず巻き返しに成功した。

リッダ戦争の結果、得られたものは、単にアラビア半島の統一だけではなかった。イスラームの人びとは、幾度も戦いを重ねることによって、大きな集団で戦う場合の戦いの仕方の戦術のみならず、戦略、つまり、敵方についての情報の入手、敵方をどのように分断し、個別に攻めていくか、先を見越した兵力の補充や兵の鍛え方、物資の輸送（兵站）の在り方、などの貴重な経験を手に入れたのである。

アブー・バクルは、いったん離脱を表明した各部族が、戦いに敗れた後、従順な姿勢を見せた場合は、寛大な処置をとった。これは、ムハンマドの方針をそのまま踏襲したものであった。こうした措置は、イスラームとの戦いに敗れた部族を新たに軍勢の傘下に収めることができたから、リッダ戦争を始める前に比べて、イスラームの武力は格段に高まった。
リッダ戦争のさ中に、ムハンマドから直接クルアーンを聞き、暗唱できた貴重な信者の何人もが失われたことは痛手であったが、リッダ戦争の結果、アラビア半島の統一は、ムハンマドの存命時よりも遥かに強固なものになった。
アラビア半島の統治の中心となったのは、マディーナ、マッカ、ターイフの、ヒジャーズ地方と呼ばれる地域の人たちだった。彼らは、通商に精通し、情報取得や、他民族との交渉ごとに長けていた者たちであった。

３）北方のふたつの巨大帝国との戦い：３つ目の危機の克服

アラビア半島の統一を成し遂げたイスラームにとって、北方のサーサーン朝ペルシャと東ローマ帝国という、自分たちより圧倒的に強大な戦力を持つ国家との対峙が待っていた。だが、イスラームが始められたちょうどそのときに、東ローマ帝国とサーサーン朝は、共に、互いの抗争によって国力を使い果たして、最弱の状態、或いは国家の終焉の状態にあり、これはイスラームにとって、この上ない僥倖であった。

仮に、イスラームがアラビア半島を統一した時に、東ローマ帝国がユスティニアヌス（在位 527～565 年）のような強力な皇帝の指揮下にあれば、イスラーム軍が勝つのは難しかったであろうし、それは、サーサーン朝に対しても、ホスロー一世（在位 531～579 年、『公正なる王の見本』、『哲人王』などと呼ばれ、国内の農地開墾に尽し、国外に対する戦いで負けることがなかった）の時代であれば、同様だったろう。

サーサーン朝とローマ帝国は、サーサーン朝の勃興（226 年）後から、400 年以上にわたって（その間、ローマ帝国は東ローマ帝国に変わったが）、戦いを繰り返し、そのため両者とも国力が消耗した結果、高い税を課していたため、支配下の人心が離れてしまっていたことが共通している。
とはいえ、イスラームは、誕生したばかりの新興勢力にすぎず、ふたつの強大な帝国と戦いをして勝てるかもしれないと思った人は、イスラームの中に、どれほどいたのであろうか？

そもそも、イスラームの人びとが、この両帝国と戦いを交える必要があったのだろうか？
イスラームの本拠地アラビア半島は、確かに東西の通商によって栄えてはいたが、食料生産地としての価値は全く無く、鉱物資源も産出していない。
したがって、サーサーン朝や東ローマ帝国の側から、アラビア半島を領有しようという意欲は沸かなかったのではないか、つまり、イスラームの側から戦いをしかけなければ、両大国から存在を脅かされることなく、支配地を、当面は安泰に保つことはできたのではないかという想像も浮かぶ。

しかし、人類の歴史は、しばしば軍事力に勝る者だけが生き残ることができたことを示している。ある地域が、特段魅力的でなくとも、わけもなく攻めこまれ、蹂躙されることも珍しくなかった。結局、生き残るためには、大国に従属するか、そうでなければ、できるだけ軍事力を強める、そのためには、戦いを続け、支配地も支配人員の数も増やしていかなければならない、ということであっただろう。

より明瞭な理由は、イスラームが自己を防衛する、というよりも、自己の勢力範囲の拡大、肥沃な地域の獲得によって豊かな富を手に入れるという欲望に従って、2 大帝国と戦ったということだろう。この説明は、ヒッティの「アラブの歴史」上巻ｐ287“膨張の経済的理由”の章に、直截的に表現されている。また、「イスラーム帝国のジハード」ｐ155“大征服はなぜ始まったか”の章にも、『アラビア半島はあまりにも農業生産力が低くて、長期的な自立性はない。いいかえるとイスラームの人びとがアラビア半島内にのみ留まっていて、東ローマ帝国と共存する余地はなかった』と記されている。

４）アブー・バクルの役割

アブー・バクルの時代に、イスラームは、東ローマ帝国とサーサーン朝という強大な敵と戦いを開始した。
結果的には、勝利を納めることになるが、その詳細な経緯については、これらの戦いが次のカリフ・ウマルの時代に引き継がれていくので、そこに記すことにする。

ムハンマドは最後の預言者であり、彼の後に、他の者が預言者となることは、あり得ないことで、それゆえムハンマド亡き後、イスラームを纏めていく後継者になるのは、誰にとっても難しいものであった。イスラームの人びとの多くにとって、神の言葉を伝えるムハンマドが死去することなど、考えたこともなく、その死去を知らされたとき、茫然自失という状態だった。中には、後に第二代正統カリフとなったウマルのように、“ムハンマドが死んだなどということは、信じられない。ムハンマドは、すぐに生き返るに違いない“と、声高に主張する者もいた。

彼らに対して、アブー・バクルは、次のように諭した。
「ムハンマドは人間であり、彼が死んだのは、まぎれもない事実である。我々はそのことを、覚悟して受け入れなければならない。　　だが、ムハンマドが、その言葉を伝えたアッラーは、今も、これからも、存在し続ける。」

アブー・バクルは、ムハンマドの古くからの友人であり、イスラームの始まりの時に入信していたこと、イスラームの存亡に関わる危機の時代をムハンマドと共に生きてきたことなどが、イスラームの人びとが、彼を指導者として仰ごうという決心をさせた。
アブー・バクルは、何事においても、ウンマ（イスラームの共同体）の意見に従うという手続きをとった。また自らの役割をカリフと称したが、これは「（預言者の）代理人」という、ごく控えめな意味でしかない。

彼は、ムハンマド亡き後のマディーナの分裂を防ぎ、リッダ戦争を断固とした決意で戦い抜き、指導者として人々の信頼を得た。
そのうえ、サーサーン朝および東ローマ帝国との戦いに乗り出し、ムハンマド亡きあとのイスラームの拡大のための貴重な礎を築いた。
アブー・バクルは、カリフとなった後、わずか 2 年で、病気のため他界した。（634 年 8 月）

＊＊＊　正統カリフという日本語の表記についての疑問　＊＊＊

正統カリフという名称は、後の時代になって、イスラームの思想家が、ムハンマドの死去後の 4 人のカリフが、いずれも共同体の総意によって選ばれたこと、また共同体の発展のために努力したと評価して、『神によって正しく導かれたカリフたち』と名前を付けたものである。英語では、The Rightly Guided Caliphs という表記で、こちらは、語源であるアラビア語に忠実なものとなっている。

日本語で、いつから、正統カリフと呼ばれることになったか不明であるが、この表現では、原語の意味を十分に伝えていないように思われる。

＊＊＊＊

【補遺１】　　女性の公的場での活躍の変遷

イスラームの創始者ムハンマドが、若い時に働いていたのは、後に妻となった
ハディージャが自ら経営していた商会であった。ムハンマドがイスラームを始めたのは、
ハディージャの励ましのたまものであり、ハディージャがイスラームの最初の信者と
されている。　　第２代カリフのウマルは、公式の場で女性たちと議論し、マディーナ
の市場管理者に女性を任命している。　ハディーシャの死去後にムハンマドの妻の
ひとりとなったアーイシャは、後に、自ら軍勢を率いて、第４代カリフのアリーと
戦ったが、当時のアラビア半島では、ほかにも女性が戦場で戦った例が記されている。
720 年頃、バスラで生まれたラービアという女性の詩は、イスラームの世界で広く
知られている。
これらの例のように、初期のイスラームの世界では、女性が公の場で活躍していた。

このような初期の頃のイスラーム社会における女性の活躍を見ると、現在の、女性が
表に出てはならないというイスラームの多くの国に見られる状況は、大きな違和感が
ある。

イスラームの世界において、一般的に、イスラームの初期のころに比べて、女性が
次第に公的な場から隔離されていった経緯は、必ずしも明確ではないようである。

この件で、最初に調べた図書は、「イスラームから見た世界史」である。この本の
Ｐ225 によると、“ビザンツ帝国やサーサーン朝において、上流階級の女性はその
地位の高さの証しとして深窓に隔離されていたことが、イスラームの世界に取りいれ
られていったのではないか“、と記されている。
この説は、補足説明程度には役立つものの、これが、主たる原因なのかと考えると、
納得できない思いがあった。

次に読んだ講談社の「興亡の世界史：第６巻：イスラーム帝国のジハード」の p224 には、
以下の説明がある。

『イスラーム帝国の中で、ヨーロッパ諸国と著しく異なるのは、マムルーク（奴隷出身者）
の活躍である。マムルークの育成は奴隷身分の青少年のうちから優れた気質を有する
者を購入して厳しい教育を施し、奴隷身分から解放したうえで、能力に応じて軍人や
官僚として取り立てる仕組みのことである。この仕組みは、血縁に依存する場合に
比べると、徹底した能力主義であり、合理的な特徴がある。
イスラームの多くの国で、マムルークが活躍し、マムルークの軍人を主体とする軍隊は
強かった。エジプトにおいては、マムルーク軍人による王朝（マムルーク朝）さえ
できた。このマムルーク朝においては、ほとんどの場合、王位の世襲は行われず、
次の王は、マムルーク軍人の中から有能な者が選ばれた。
エジプト以外にも、マムルークの登用は、イスラームの世界で広範に行われた。
このように、男子の軍事的能力を優先するような統治のあり方が、発足当初の
イスラーム社会とは異なる、男性優位の社会をもたらした。』

この説明は、かなり説得力があると思う。

ただ、私見では、次のような説明も補足されるべきと思われる。

『優秀な青少年を、どこかから連れてくるという制度下では、優秀な家系を保持するために必須の女性の地位は、低減していかざるを得なかった。また、マムルークの制度は、男性に限られたから、有能なマムルークによって、軍人や官僚の中枢が占められるようになると、女性は、その中に割って入ることができなかった。』

イスラームの世界で数多くの哲学者が出ているが、11 世紀に「知の巨人」と呼ばれたアブー・ガザーリーが登場している（1058～1111）。彼は、アリストテレスの誤りを指摘するなど多くの業績を遺しているが、一方で、女性が公の場に出ることについて、次のように、真っ向から否定する見解を示している。「女性は自宅の私室に留まって、糸紡ぎに専念すべきで、度を超えて私室から出入りしてはならない・・・」
アリストテレスの誤りを、論理的に指摘するほどの能力のある哲学者が、女性の社会的な活動を抑え込むことについて、極端な主張を展開しているが、彼の主張はイスラームの社会に、大きな影響を及ぼしたという。

＊＊＊＊＊＊
現代の女性の活躍の程度は、イスラームの国によって、さまざまである。

私がエジプトに旅行した時には、エジプトの小中学生の遺跡への遠足旅行と、何度も一緒になった。屈託なく男女の仲間と笑い合う共学の彼らは、日本の小中学生と、何ら変わりの無い印象を受けた。ひとつ異なるのは、彼らから、ひとなつっこく、共に写真に納まるように、何度も依頼されたことである。　エジプトでは、また、スカーフで髪を覆っただけで働いている女性も多く見かけた。カイロ空港で、旅行代理店と空港関係者の仲立ちをして、顔役のようであったのは、威勢のいい女性であった。また、少し前の米国機械学会の会長は、エジプト出身の女性だった。
エジプトで、女性の大学進学率はかなり高い。だが、経済が思わしくないため就職率が低く、特に大学卒の女性には厳しい。つまり、エジプトは、大学進学までは男女の差がなく共学が進められている進んだ国であるのに、経済情勢が思わしくないため、女性の多くは職を得るのが難しい。少し前の日本と似通ったところがある。こうして、やむなく結婚を選ぶ女性が多くなり、その結果、出生率が高く、人口は増え続けている。現エジプト政府は、「エジプトは、人の住める場所がナイル川周辺など、ごく狭い土地しかない（＊）。今のような人口急増を放置すると、国がたちいかなくなる」として、人口抑制のキャンペーンを始めた。イスラームの社会では極めて珍しいことであるし、”アラブの春“の直後に政権を担った、イスラームの経典を忠実に守ることに熱心であった政権では考えられない柔軟さである。

注（＊）「国土の 20%しか人が住めない」と、エジプト政府は説明しているが、それでも可住面積は約 40 万㎢もあり、日本の全国土より広い。日本では国土の１/３が人の住める面積とされている（私が小学生の頃は、たしか、国土の１７%しか人が住めないとなっていた）。日本の可住面積約 12 万㎢に比べ、日本より人口の少ないエジプトの可住面積 40 万㎢は潤沢のように見えるが、農業の比率が日本よりかなり高いことを考えると、土地は不十分ということなのだろう。

一方、厳格にシーア派の戒律を守るイランにおいては、男女の学校は別になっているものの、大学・大学院の学生は、女性のほうが多いというのは、素晴らしいことである。だが、女性の社会進出については、なお、多くの障害があるらしい。

【補遺２】エジプトの言語の変遷：

エジプトのプトレマイオス朝（BC306 年～AD30 年）は、ギリシャ人が支配していた。彼らは、王族をギリシャ人だけで占める方策をとっていたが、支配を円滑にするために、ファラオを名乗り、伝統的な古代エジプトの宗教をそのまま取り入れた。プトレマイオス朝時代に建てられて多くの古代エジプト神殿が、多数、遺跡として現在まで遺されている。（プトレマイオス朝までが、古代エジプト時代と区分される。）
プトレマイオス朝がローマ帝国に倒されると、エジプトはローマの直轄属州となり、豊かな穀物生産地として、ローマ帝国（分裂後は東ローマ帝国）を経済的に支えた。

キリスト教が、エルサレムからローマ帝国の中で広まると、エジプトにも浸透してきた（エルサレムとアレキサンドリア間の直線距離は 500km ほどしかない）。
キリスト教（コプト教）は、徐々にエジプト全土に広まっていき、４世紀末には、東ローマ皇帝が、エジプトに、古代からの伝統的宗教の棄却令を出した。（エジプトにとって、第一次の文化断絶と呼ばれる）。キリスト教徒は、発足の直後は暴力に無縁と考えられ、厳しい迫害を受け多数の犠牲者を出した。だが、このころには、時の政治権力と一体化し、異教徒ないしは異端者を、容赦なく迫害する側になっていた。

古代から引き継がれてきたエジプトの文字は、エジプト固有の宗教が消えはじめていく４世紀末頃から次第に使われなくなった。　　エジプトの文字は、神聖文字（神殿、墓地などに記される）、書記用のヒエラティック、民衆用のデモティックの３種類があったが、特に、神聖文字にとっては、古代エジプト宗教を禁じられたことは、壊滅的な打撃であった。

古代からの文字にかわって、一時、エジプトで使われたのは、ギリシャ文字と古代からのエジプト文字の混合であるコプト文字である。

イスラームがエジプトを征服したとき（アレキサンドリアは 642 年にイスラーム支配下にはいっている）、当時の宗教は、下エジプト（ナイルデルター帯を指す）の多くの人々がキリスト教徒（コプト教徒）になっていた。エジプトのコプト教徒は同じキリスト教徒でありながら、東ローマ帝国から、異端であるとして厳しい迫害を受けていた。イスラームに征服される直前 10 年の東ローマ帝国の支配は、エジプトにとって暗黒の 10 年、と呼ばれるほど苛烈なもので、イスラームは、圧政からの解放者として歓迎された（文芸春秋社　世界の都市の物語１０「カイロ」p50）。

イスラームに征服されても、改宗はすぐには行われなかったが、その理由は、改宗を強制されなかったからである。イスラームが「剣かクルアーンか」と迫ったというのは、ヨーロッパのキリスト教徒が作り上げた偽りで、イスラームは、ユダヤ教徒およびキリスト教徒に対しては、同じ神を信じる啓典の民とみなし、信仰の自由を認めた。彼らは、税を払えば、従来の信仰を守ったまま、生活していけたのである。

エジプトにおいて、最初は、アラビア語を用いるのは支配者だけであった。だが、支配される側にとっては、支配者の言葉を話せるようになるのは、しばしば必須のことであったから、次第にアラビア語を話せる人々が増えていったのだろう。

改宗が強制されなかったとはいえ、支配者が信仰するイスラームに改宗することは、税の上でも、生活全般の上でも、有利であったため、イスラームへの改宗は、徐々にではあったが確実に進んでいった（第二次の文化断絶と呼ばれる）。
イスラームに改宗した場合に、最も重要なクルアーンは、アラビア語によってのみ唱えることができる。アラビア語以外のクルアーンの翻訳は、クルアーンとはみなされず、単なる注釈である。したがって、イスラームに改宗した人びとは、必ずアラビア語によるクルアーンを読誦しなければならない。イスラームへの改宗を通じてアラビア語に接する機会を、多くの人がもつようになった。

結局、下エジプトは 11 世紀ころ、上エジプトも 14 世紀ころに、アラビア語が優勢になったという。こうして、エジプト人は、長い時間をかけて古代からの言語の使用をやめ、アラビア語を用いるようになった。したがって、今では、古代の神聖文字の発音を伝える人は、誰もいない。

日本人の感性からすると、長い歴史をもち、独自の文化、文学や碑文などを遺してきた民族が、自分たちの固有の言語を捨て、征服者の言語を用いるようになった、というのは、釈然としない思いがあるが、それは他民族による長期間の支配を受けることが繰り返されるという、世界の多くの人類の歩んできた歴史を経験していないからかもしれない。

エジプトの人びとは、ある日から急に、今までの言語を捨てて征服者の言語を使用せよと迫られたのではない。征服者の言語を、徐々に使えるようになるうちに、また、征服者の宗教を受け入れるうちに、古から使われてきた独自の言語を、数百年を経て、次第に使わなくなったということであり、ある意味では、しごく自然の流れともいえる。

イスラームが始められた頃、アラブ人というのは、アラビア半島に住んでいる人々だけを示す言葉であった。だが、今は、アラブ人というのは、“アラビア語を話し、アラブ文化を受容する人々“という範疇に入る人々であり、アラビア半島だけではなく、国として、エジプト、イラク、シリア、レバノンなど、多くの国の人びとを、アラブ人と呼ぶ。現在のエジプトの正式国名は、“エジプト・アラブ共和国”である。

【補遺３】　十字軍の影響

現代におけるイスラームの過激派は、1096 年から、およそ 200 年にわたって続いた十字軍運動について、「イスラームは、エルサレムを含む征服地において、キリスト教徒やユダヤ教徒が共存する政策を採っていた。十字軍は、キリスト教徒が、それを無視して、イスラームに対し一方的な戦いをしかけた蛮行であり、そのために、イスラーム社会は深く傷つけられ、現代に至るまで、根強い不信を作った」と断罪している。

しかし、イスラームの歴史家の評価は、次のように、異なっている。

「十字軍運動は、ビザンチン帝国を含めた東方世界へも自らの支配権を広げようという邪なローマ法王の欲望に、愚かなキリスト教社会が踊らされ、イスラーム社会に蛮行を加えたものである。

結果として、キリスト教国に対しては、イスラームの高度な文明、イスラームの文化圏に受け継がれた古代ギリシャの学問などに接触する機会を与え、イタリアを始めとするルネサンス運動の元になるなど、大きな影響を与えた。
しかし、イスラームの側に対しては、十字軍運動は、さほど大きな影響は与えなかった。たしかに、十字軍運動への対応のために、いくつかの王朝の興亡があったことは事実であるが、当時のイスラーム側の文明に比べると、キリスト教国の文化は著しく劣るもので、イスラームに対して文化的にいかなる衝撃も与えなかった。政治的にも、エルサレムは100年ちかくキリスト教軍に占領されたものの、紀元前からシリアの重要都市であったダマスカスは、包囲すらされなかった。200 年の後には、キリスト教軍は敗退して、中東から追い出された。王朝の興亡は、イスラームの中だけでも、繰り返し行われたことであり、キリスト教国からの影響を、ことさら、要因に加えるまでもないことである。

これに対して、十字軍運動の末期に、それとは全く関係なく生じたモンゴル軍の襲来は、圧倒的に凄まじいもので、イスラームは、モンゴル軍に対して殆ど戦勝したことがない。（＊）
モンゴル軍によって、アッバース朝の時に作られた首都バクダードは跡形もなく破壊され、殺されたイスラームの民の数は、数十万人と言われる。このとき、イスラームの多くの貴重な文献が失われ、750年から続いたアッバース朝は消滅した（1258年）。また、紀元前から続いていた古都ダマスカスも占領された。
圧倒的なモンゴル軍の武力の前で殆ど無力であったイスラームは、『神は常に我らと共におわします』という信念が激しく動揺し、イスラームの教義としてモンゴル軍の襲来をどのようにとらえるべきか、深刻な問題となった。
モンゴル軍は、長くイスラームの地に居座った。結局は、自らの教えであるチベット仏教を捨てて、イスラームに帰依し、イスラームの地に、溶け込むこととなった。」

（＊）
唯一の例外といってよいのが、1260年エジプトのマムルーク朝軍がモンゴル軍に対して圧勝したアイン・ジャールートの戦いである。しかし、この時モンゴル軍は、全体として，大ハーンのモンケの訃報に対応して、本国への帰還を始めており、アイン・ジャールートの戦いにおけるモンゴル軍は1万人で、シリア派遣のモンゴル軍10万人の一部だった。戦いの仕方も、他のモンゴルの戦いとは異なっていた。仮に、全軍に帰還の動きがなければ、モンゴル側の敗戦そのものがなかっただろうし、仮に敗戦しても、それまでのモンゴルのいくつかの敗戦と同様に、圧倒的な数と優れた戦術で報復戦が行われ、モンゴルの勝利に終わった可能性が高いと推定される。

この戦いを契機に、シリアの地はエジプトのマムルーク朝が優勢になった。

【補遺４】　エジプトと十字軍に関する追記

エジプトは、紀元 641～642 年に、イスラームの将軍アムルによって征服された。このとき、エジプトの民の多くがキリスト教徒であったが、彼らはキリスト教コプト派であり、東ローマ帝国から見ると異端であったため、厳しい迫害を受けていた。そのためイスラームによる征服は、むしろ歓迎された。イスラームの征服下にあって、コプト派の信奉は容認されたが、イスラームへの改宗は徐々に行われた。

当初、イスラーム社会にとって、エジプトは豊かな農産物の供出地としての役割のみを担っていたが、エジプトの軍事力は次第に強くなり、しばしばイスラーム社会の最強国となった。9 世紀の末以降、16 世紀の初頭までの殆どの期間、聖地マッカとマディーナを支配していたのは、バグダードのアッバース朝などをさしおいて、そのときどきのエジプトの支配者だった。
また、十字軍戦争において、イスラーム側の主体となったのは、多くの場合、エジプト軍であった。

（１）ファティーマ朝（909 年～1171 年）
ファティーマ朝は、シーア派の一分派であるイスマーイル派が、チュニジアにおいてベルベル人の支持を得て建てた王朝である。10 世紀半ばに、エジプトを征服して勢力を拡大した。10 世紀の後半には、シリアにまで勢力を伸ばし、970 年にはエルサレムを支配下においた。エルサレムは、それまでのイスラームの支配者と同様、イスラームとキリスト教徒およびユダヤ教徒が共存する政策が続けられた。
ファティーマ朝はアラビア半島にも勢力を伸ばし、聖地マッカやマディーナを、その勢力下に置いた。

1009 年に、ファティーマ朝の第 6 代カリフ・ハーキムが、エルサレムの聖墳墓教会の破壊を命じ、教会の建物は一時消滅した。ハーキムは、厳格なシーア派の教義に固執し、キリスト教徒だけでなく、ユダヤ教徒やイスラームのシーア派以外の人にも、厳しい姿勢をとった。学術を奨励し、公正さでも知られているが、彼の奇矯な行動は、多くの人の恐怖の的であった。あるとき、彼は、忽然と沙漠の中に姿を消し、その後、2 度と現れなかった。
ハーキムが、突然、姿を消したことは、イスラームの人びとの大多数にとっても有難いことであった。ハーキムの死後まもなく、キリスト教徒、ユダヤ教徒の信仰も、従来のように自由に戻った。イスラームの民にとっては、ハーキムの行ったキリスト教徒の迫害は、独りの奇矯なカリフがおこなった一過性のできごとであった。
だが、キリスト教徒にとっては、そのようには受け取れなかったであろう。そもそも、エルサレムは、キリスト教にとって最重要な聖地である。たとえ信仰の自由が保障されたとしても、その地がイスラームによって支配されていること自体が、いったん注目されれば、許しがたいことに思えた。

一方、イスラームの人びとにとっては、聖墳墓教会の破壊は、ひとりの奇矯なカリフがとった行動であり、イスラーム社会全体としてキリスト教徒を、敵視していない積りであった。1048 年には聖墳墓教会は再建され、キリスト教徒の巡礼も復活した。　結局、11 世紀には、エルサレムへのキリスト教徒の巡礼者は、それまでより、大きく増加していた。
（歴史上、3 人のカリフが、キリスト教徒に改宗を強いたが、イスラームの人びとからすると、それらは一過性のものであった。）

エルサレムへのキリスト教徒の巡礼が、強盗に襲われて命を落とすことはあったが、それはどの宗教を信仰していても、当時の旅行には避けられないリスクなのであって、イスラームの側が為政者としてキリスト教徒の巡礼者に危害を加えたことはなかった、というのが多くの歴史家の説明である。

11 世紀末には、ファティーマ朝は衰退した。セルジューク朝も衰退し、シリアにおいてイスラーム諸国家が分立し、まとまりのない状態にあったときに、十字軍がやってきた。

イスラーム側は、当初、十字軍との戦いを、イスラームとキリスト教軍の戦いとは考えもしなかった。イスラームとすれば、自分たちが軍事的に征服した土地でも、殆どの場合、キリスト教徒に改宗を強制したことはなく、多くのキリスト教徒が、税の不公平さを耐えれば、おおむね、平和に暮らしていけた。キリスト教やユダヤ教が聖地として重視しているエルサレムを、イスラームが占領した（637 年）あとも、キリスト教及びユダヤ教の聖地としても尊重し、３つの宗教が共存する協定を交わしていた。

十字軍がやってきた当初、ファティーマ朝は、敵対していたセルジューク朝との争いを有利にするために、キリスト教軍に連携を持ち掛けた(何も知らないファティーマ朝は、『敵の敵は、味方にできるかもしれない』と期待した)。
だが、キリスト教軍は、この提案を拒否し、ファティーマ朝の支配下にあったエルサレムを、包囲戦の末に陥落させ、夥しい数のイスラームの人びとや、ユダヤ教徒が虐殺された(1099 年)。
これは、十字軍を提唱したローマ法王が「エルサレムを奪回するために、イスラームの人びとやユダヤ教徒を殺害してもかまわない。それは、神の意志であり、神の意志を実行したものは、天国にいくことができる」と、説いたためであり、十字軍は、エルサレムだけではなく、行く先々で、このような異教徒虐殺を繰り返した。エルサレムは、イスラームの統治下にあっては、400 年以上の長きにわたって、イスラーム、キリスト教徒、ユダヤ教徒が、殆どの期間を、それぞれの信仰のもとに共存してきたが、十字軍によって、それは破られた。

一般に、この頃の戦争で、勝った側は、捕虜を多く獲得することに力点を置くのが、ふつうだった。その理由は、捕虜が高貴な身分であれば多額の身代金を獲得できるし、捕虜が身代金を払えなければ、奴隷として売って金を手に入れるためである。だが、エルサレム陥落時の悲惨な状況は、イスラームの側にも伝わり、その後の両者の戦いの勝った側が敗者に対して行う仕打ちは、互いに、しばしば、虐殺を伴った。

＊＊＊＊
そもそも、十字軍戦争の前までは、キリスト教徒とイスラームの人びとの、互いを見る視線に、大きな差異があったのではないかと思われる。
イスラームの人びとからすると、ムハンマドがキリスト教徒を「同じ啓典の民」と扱ったことからわかるように、キリスト教そのものを、抹殺すべきもの、恐怖をもって見るべきものとは考えなかった。たしかに、キリスト教国の東ローマ帝国及びスペインの西ゴート王国と戦ったが、彼らは、相手がキリスト教国だから戦ったのではなく、自分たちの勢力範囲を拡大し、経済的権益を確保するために戦ったのであり、それは、イスラーム内部の争いと基本的に変わることはなかったと考えられる。

それに対し、キリスト教徒の多くは、イスラームが勃興した当初から、イスラームを恐怖をもって見つめていたと思われる。

キリスト教は、始まってから約300年もの長きにわたって、ローマ帝国から迫害され続けてきた。それに対し、イスラームは、始められてから、わずか数十年の間に、東ローマ帝国と戦って、豊かなシリアの地およびエジプトまで奪うほどの強い勢力になった。
イエス・キリストは、おそらく生涯にわたって、武力とは無縁であったのに対して、ムハンマドは、自ら戦いの先頭に立って勢力を広げた・・・。イスラームは、今もキリスト教の聖地エルサレムを支配している・・・・・。

（２）サラディンとエジプトのアイユーブ朝

200年におよぶ十字軍戦争において、イスラーム軍、キリスト教軍の全ての軍人の中で、武将としての能力、政治力、人格の面で、最も高名な人物が、サラディン（サラーフ・アッ＝ディーン）であるが、彼は、主としてエジプト軍を率いて戦った。
サラディンは、今のイラク北部の町ティクリートに生まれたクルド人である。彼は、若いころから、有能な武将であった叔父のシールクーフの部下となり、ダマスカスをはじめ、シリア各地で経験を積んでいったものの、目立つ存在ではなかった。

十字軍のエルサレム王国にとっては、ファティーマ朝の治めるエジプトは、穀物生産の豊かな土地であり、なんとしても手に入れたい土地であった。そこを治めているファティーマ朝は、ますます弱体化していた。　　1163年から、3度にわたって、十字軍のエルサレム王国は、エジプト征服のための遠征軍を送った。

この頃には、長い間分裂していたシリア地方のイスラーム全体を、ヌルッディーンという太守が統括するようになっていた。彼は、自分の武将の中で有能な、クルド人のシールクーフに8000の騎兵を与え、ファティーマ朝救援の部隊をエジプトに派遣した。この部隊の中に、シールクーフの甥・サラディンが含まれていた。サラディンは、シールクーフから副将に任命されていたくらいだから、有能であったことは確かだが、叔父の名声に隠れて、周囲には殆ど知られていなかった。陽気で、酒と女遊びに興じていた話が伝わっている。

ファティーマ朝から歓迎されたシールクーフは、十字軍を退け、ファティーマ朝のカリフから宰相に任命された。カリフは病弱であり、エジプトの実質的な支配者はシールクーフになった。だが、彼は暴飲・暴食の癖があり、あるとき食事中に頓死してしまった。

突如死去したシールクーフの後任を誰にするか、揉めたあげく、その時点までは、名の知られていなかった甥のサラディンが選ばれた。おそらく、ファティーマ朝の重臣たちは、御しやすい雇われ宰相にできると思ったのだろう。
だが、宰相となったサラディンは、その期待を裏切った。彼は、酒と女をきっぱりと断ち、ファティーマ朝の不穏な重臣たちを追放して、兄弟たちを代わりに配置した。スーダン人の親衛隊の謀反を一蹴し、さらには、エルサレム王国と東ローマ帝国の連合軍のエジプトへの侵入も撃退した。こうして、半年で、サラディンはエジプトの真の主となった。

彼は、病弱のファティーマ朝の若いカリフと、友情で結ばれていて、カリフを最後まで擁護した。カリフが跡継ぎをもうけぬまま死去すると、1171年にアイユーブ朝を開いた。その際、前王朝の王族を誰も殺さなかった（750年、ウマイア朝からアッバース朝に変わった時、ウマイア朝の王族の殆どが殺害された）。

彼は、エジプトをシーア派からスンニー派に変えた。かつてファティーマ朝の当主は、バクダードのアッバース朝カリフと同列のカリフであると宣言していたが、スンナ派に戻ったことでカリフは名乗らず、これによって、当時イスラームの中の最強太守であり、自分をエジプトに送り出したヌルッディーンに対して、叛意のないことを示した。

サラディンは、自分の城砦を造り上げた。それが、今日も多くの観光客の訪れるカイロのシタデルとして知られるものである。古代エジプト時代には、今のカイロは存在しない。ファティーマ朝末期のカリフたちとサラディンが、今のカイロを造ったといえる。彼は、ファティーマ朝の莫大な財宝を臣下に分け与えたほかは、国政に活用して、神学校や大規模な病院を開設し、自分は何も受け取らなかった。

その後、シリアの太守ヌルッディーンが死去すると、その後継をめぐって内紛が発生し、内紛の当事者の一方から支援要請を受けて、サラディンはダマスカスに赴いた。この時点のサラディンは、シリアでは、まだ成り上がり者としか見られていなかった。
この頃には、イスラームの人びとは、十字軍の侵略の背景が、キリスト教側が仕掛けてきたイスラームとの宗教戦争であることにようやく気づいて、イスラームがひとつに纏まるべきとの考えが広まっていた。だが、現実は、相も変わらず、イスラーム同士の勢力争いが止むことはなかった。

ダマスカスに来て 12 年後、サラディンは、ようやく、イスラームを纏める能力のある指導者として周囲から認められるようになり、全イスラームを糾合して指揮権を把握した。十字軍戦争の中で、イスラーム軍とキリスト教軍の最大の戦いは、1187 年、エルサレムの北 100㎞ほどのヒッティンで行われ、キリスト教軍は、サラディンの作戦によって、壊滅的な敗戦を喫した。
その後、エルサレムは包囲されて陥落したが、このときのサラディンの処置は、長い十字軍戦争の中で例外的なもので、サラディンは住民の虐殺や略奪を禁じた。さらに、弟の提言を受け入れ、身代金の払えない捕虜まで解放した（身代金の払えない捕虜は、奴隷として売られるのが当時の慣例）。これは、キリスト教軍によるエルサレムの陥落時とは、全く異なるものであった。こうしてエルサレムは 88 年ぶりにイスラームの支配下に戻った。

第 3 回十字軍はエルサレムの奪回を目指して、サラディンとの間で行われた。十字軍の指揮官のひとりは、獅子心王と呼ばれた英国のリチャード一世だった。十字軍側は、いくつかの戦いに勝ってサラディンの勢いを止め、キリスト教徒がエルサレムを巡礼できる協定を結ぶことに成功したが、エルサレムの支配権を奪回することはできなかった。
サラディンは 1193 年、60 歳で病没した。死後には棺桶に使う費用もないくらい、個人の財産は皆無だったという。

（３）その後の十字軍

1202 年に始まった第 4 回十字軍は、当初、エジプト攻略を計画していたが、ヴェネチアの元首・ダンドロの誘導によって、ヴェネチアの商売仇である東ローマ帝国を襲い、一時滅亡させた。そもそも、十字軍のきっかけとなった東ローマ皇帝の依頼は、セルジュク朝との戦いに負けたため、犬猿の仲であったローマ法王に傭兵を貸してくれと頼み込んだのに、ローマ法王が自分の名声を高める機会と捉え、エルサレム奪回をカトリック諸侯に呼び掛けたものであった。東ローマ帝国からすると、エルサレムを含むシリア一帯が、今はイスラームに占領されているが、基本的に自国領土であり、そこにローマ法王側の軍隊が遠征するとは言語道断であった。東ローマ帝国は、エルサレム奪還に、自国軍隊を参加させなかっただけでなく、時にイスラーム側に情報を流して十字軍の動きを邪魔した。

このことは、十字軍諸侯はよく知っていたから、ヴェネチアの東ローマ帝国襲撃の誘いに殆ど反対はしなかっただろう。
第5回十字軍は1217年に開始され、エジプト攻撃を実施し、海港都市ダミエッタを占領することに成功したものの、カイロに進軍する途中で、ナイル川の堤防をエジプト軍に切られて、泥沼の中に身動きが取れなくなり、全軍が降伏した(1221年)。
第6回十字軍は、法王から破門された神聖ローマ皇帝・兼・シチリア王のフリードリヒ２世が主役となった。彼は、エジプトのアイユーブ朝と緊密に連絡をとり、交渉によって、10年間エルサレムの支配権を手に入れることに成功した。

（４）マムルーク朝と十字軍の終焉

第6回十字軍の成果であった10年間のエルサレム支配期限が終わると、エルサレムは再び、イスラームのエジプトの支配下に戻った。
第7回十字軍は、フランス国王ルイ9世によって、エルサレムの支配者であるエジプトへの侵攻を目的として始められた。1250年、十字軍がエジプトに侵攻してきたとき、アイユーブ朝のスルタン・サーイフは、病をおして、ナイル・デルタのマンスーラに布陣したが、そこで急死した。後を継ぐべき息子は、シリアで戦いに従事していたため、アイユーブ朝軍は指揮者不在の状態になった。このとき、陣地に同行していたサーイフの妻シャジャル・アッ＝ドゥッルは、軍の動揺を防ぐために夫の死を伏せ、食事なども生前のまま運ばせ、夫の存命を装いながら、全ての指示を自分で行った。彼女は、腹心の部下に命じて戦いを続行し、フランス王軍をマンスールの地で破り、ルイ9世は捕虜となって、第7回十字軍は終了した。
サーイフの妻シャジャル・アッ＝ドゥッルは、もともと、バクダードのアッバース朝の後宮にいた奴隷で、アイユーブ朝のスルタン・サーイフに贈られたが、サーイフの子を産んで正式な妻となった。彼女の決断によって危機が救われたことで、エジプト軍の主力をなすマムルーク軍団の強い支持を受け、イスラームの世界では唯一の女性スルタンとなり、マムルーク朝（1250年～1517年）が始まった。彼女のスルタンとしての治世は、3か月で終わったが、この王朝は、血統に関係なく、マムルク軍団の中で最も信望を集めた者がスルタンになる、という例が多くなり、強い勢力を誇った。　シャジャル・アッ＝ドゥッルは“真珠の生る木”という意味で、数十年後の伝記作家は、彼女のことを、「類まれな美しさで、見識があり、抜け目がなく、知性的であった」と記している。

マムルーク朝軍は、1260年のアイン・ジャールートの戦いで、モンゴル軍を破り、その後、シリア全域にわたって力を伸ばした。1270年には、難攻不落とされていた十字軍の要塞クラック・デ・シュバリエを陥落させ、1291年、十字軍に残されていた最後の拠点アッコンを陥落させ、これによって、約200年続いた十字軍運動は終った。

	クラック・デ・シュバリエ(騎士の城) 十字軍の築いた城の中で、最も有名な城砦。 小高い丘の上に建造されて難攻不落とされ、サラディンも攻略をあきらめたと言われる。 世界遺産に登録されている。

【補遺５】　遊牧民族と定住民族

これまでの歴史学では、『定住して農耕を行う民族が文明を創り上げ、育んできたのに対し、遊牧民族は、彼ら自身では有意な文明を創りだすことはできず、定住農耕民族の周辺に棲息し、時に農耕民族の居住領域を侵略し征服王朝をたてたことはあるが、多くの場合は定住民族に従属することによって、定住民族の創り出した優れた文明を導入し､それによって次第に文明化していった』､という説が有力であったように見える。

これに対して、最近の歴史学者の一部は、『遊牧民族も、独自の文明を創り上げてきた』あるいは、より強く、『遊牧民族こそが文明の重要な担い手であった』と主張する。

農耕民族を主体として考える史観は、西欧史観、中華史観ともいわれ、ヨーロッパや、中国、特に共産主義中国において国策ともいえる歴史観となっている。
日本人は、年間降雨量の平均が 1700ｍｍにも及ぶ湿潤な土地に暮らしており、農耕民族を主体として考える史観になじみ易い。

わたしにとって、沙漠のイメージは、人間にとっての「死の世界」であった。
小学生のときに“砂漠は生きている“というドキュメント映画を見て、沙漠にもさまざまな生物が生きていることは理解していた。だが、そこは人間が生活する世界ではないと理解していた。わたしにとって“沙漠の横断の旅”というのは、生きて目的地に辿り着けるかどうか、極めて不確実な旅というイメージがあった。

だが、ムハンマドの頃のアラビア半島の民にとって、“沙漠の横断の旅”というのは、自然現象だけを考えると、当たり前に成功する旅であった。、運を天に任せるような、成功の可能性がごく低いものなら、この通路がシルクロードの一環を担うことは有り得ない。(むしろ、隊商にとっての脅威は、当時、頻繁に行われたと考えられる盗賊による襲撃だったろう。)

アラビア沙漠は昼の気温が高く、移動は夜間にしか行えないが、夜の沙漠は海のように、多くの場合、安定した通行の場であった。点在するオアシスは、海の通行における港の役割を果たした。明確な道路はなくても、沙漠に精通した者は、星の位置、地形、獣の足跡、獣のフンの状況、カターというオアシスに通う沙漠鳥などから、正確な道筋を辿ることができた。さらに、ひとコブラクダの重要な能力がある。ひとコブラクダは、わずかな水で、100kg 程度の荷物なら一晩で 30km は進むことができるし、巧みな乗り手だけであれば、一晩で｀150ｋｍ進むとも言われている（原書房、宮崎正勝著「世界史の誕生とイスラーム」ｐ２７ほか）。

遊牧民族は、“定住するしか能のない”非遊牧民族や低地の民族を、そもそも自分たちより劣る者として低く見ていた、という事実がある（共同出版社【オクスフォード】「イスラームの歴史１」ｐ22）。　個々の戦闘能力からすると、幼いころから馬に乗り、遠距離の敵でも襲撃してきた騎馬民族は、農耕民族より遥かに優れていた。
このような彼らが、量的には、明らかに自分たちを超えていたとはいえ、“定住するしか能のない”シリアの民族の文明に対して、何ら気後れすることはなかった、という事実は、留意しておく必要がある。

【補遺６】　ムハンマドの子孫は、オスマン朝に対する“アラブの反乱”を起こしたのち、現ヨルダン王家を開いた

ムハンマドを輩出したクライシュ族のハーシム家は、第 4 代正統カリフのアリー以後は、長い期間、政治の表舞台には出なかったが、それでも、イスラーム社会では、抜きんでた名家としての尊敬は維持していた。ハーシム家は、オスマン朝の終焉期に、再び政治の表舞台に登場し、現在のヨルダン王家につながっている。

（１）オスマン朝の宗教別統治策

オスマン朝（1299～1922 年）は、長期間にわたって、小アジア、中東、北アフリカ、バルカン半島などを支配下に治めていたが、その中には多くの民族が含まれていた。
15 世紀以降、オスマン朝は、各地域のギリシア正教徒、アルメニア教会派(キリスト教)、ユダヤ教徒のそれぞれについて、自治組織を作らせ、貢納の義務を果たすのと引き換えに、彼らの固有の信仰と法と習慣を認めた。つまり、オスマン朝は、統治にあたって、宗教別に統治したのであり､オスマン朝にあっては､民族意識というものは表に出ることはなかった。

（２）オスマン朝内部の　民族意識の高揚

オスマン朝は 17 世紀の末頃から衰退が明らかになった。19 世紀には、ヨーロッパ列強は、オスマン朝内の多くの民族意識の高揚をもちかけて、オスマン朝の分断を図った。
スルタンの権力の低下に伴って、19 世紀末には議会が招集されたが、スルタン側から何度も権力回復の試みがあり、議会側との激しい応酬が続いた。1908 年に招集された議会のメンバーは、トルコ人 142 名、アラブ人 60 名、アルバニア人 25 名、ギリシャ人 23 名、アルメニア人 12 名、ユダヤ人 5 名、ブルガリア人 4 名、セルビア人 3 名などとなっており、多様な民族の構成が窺える。

もともと、民族意識の薄かったオスマン朝内にも、次第に民族意識が高まってくると、青年トルコ党により、トルコ人を優遇すべきという活動が強まり、アラブ人そのほかに対する迫害が始まった。対応して、アラブ人の中には、アラブ民族主義が台頭した。

（３）第一次世界大戦と“アラブの反乱”、アラビアのロレンス

第一次世界大戦の前から、ドイツ帝国は、イギリスとインドの交通の要衝であるスエズ運河を手中に収めようとし、さらに、オスマン朝を通じて、イスラーム諸国全体を反イギリス、反フランスに動かし、ドイツに味方させようとした。
1914 年に第一次世界大戦がはじまると、オスマン朝は、ドイツ側に与して参戦し、英、仏と敵対し、国内に対しても厳しい締め付け政策をとるようになった。1915 年には、アラブ民族主義の多くのアラブ人が捕らえられ、拷問を受けたため、アラブ民族のオスマン朝への反感は決定的なものになった。

この頃、オスマン朝の命を受け、アラビア半島のヒジャーズ地方（マッカ、マディーナを含む紅海沿いの地方）の太守となっていたのは、マッカに本拠をもち、ムハンマドの血を

ひく、ハーシム家のフサイン・イブン・アリーだった。彼は、オスマン朝のアラブ人に対する抑圧的な政策に強い不満を持っていたが、ムハンマドの子孫であるハーシム家の、全イスラームへの影響力を利用しようとしたイギリスが、彼に接近して、後に“フサイン・マクマホン協定”と呼ばれる覚え書きを交わした。この覚え書きによれば、フサインが英仏側に立って協力すれば、英仏側がドイツ側との戦いに勝利したのちに、エジプトからペルシャの広範な範囲にわたるアラブ王国をフサインが樹立することを、支援すると約束していた。
1916 年、フサインはヒジャーズ地方の、オスマン朝からの独立を宣言し、ヒジャーズ王国と称し、”アラブの反乱“と呼ばれるオスマン朝との戦いが始まった。ハーシム家にとってみれば、本来、イスラームの盟主は、イスラームの始まりの地であるマッカ出身の自分たちこそが、なるべきという思いもあっただろう。
フサインは、できるだけ自分の部族の者を多く味方に招集したかったが、オスマン朝が、予めアラブの軍をバルカン半島の戦場に送り出していたため、招集できるアラブ軍は限られていた。しかも、ヒジャーズ地方には、このとき、15000 名ものオスマン朝軍が駐在していて、戦いは容易ではなかった。このとき、イギリス軍から派遣され、フサインとともに戦ったのが、トーマス・エドワード・ロレンス（“アラビアのロレンス“）である。ロレンスは、アラブ軍の装備の近代化を図り、兵の訓練をして、戦法としてゲリラ戦を提案した。彼らは、苦難の末、オスマン朝軍に勝利した。

だが、イギリスには、フサインとの約束を守るつもりは、最初から無かった。イギリスは、1916 年に、ロシア、フランスとの間で、サイクス・ピコ条約を交わし、大戦終了後に、3 国で小アジア半島、中東を含む旧オスマン朝領土を分割することを取り決めていた。
サイクス・ピコ条約は、1917 年に生じたロシアの 11 月革命で政権を握ったソ連政府が暴露し、これを知ったフサインは激怒したが、なすすべがなかった。
ロレンスについては、西欧からは、「誠意をもって、アラブのために戦った」とみなされることが殆どだが、イスラーム側からは、最初からイギリスのためだけに行動し、アラブを利用したに過ぎない、という評価もある。

（４）第一次世界大戦後、アラビア半島をサウド家に奪われる
第一次世界大戦は、英仏の勝利に終わったが、フサインは、ヒジャーズ王国の独立を認められただけであった。
しかも、そのヒジャーズ王国も、内部の団結を得ることに失敗したところを、1925 年、アラビア半島の中央部のリヤドを拠点とするサウド家に攻められ、滅亡した。

（サウド家：
アラビア半島中央部のリヤド近辺を拠点としていたが、18 世紀中ころ、当時、教義の乱れたイスラームの純化を唱えるワッハーブ派を擁護したことにより、勢力を強めた。第一次サウド王朝は、オスマン朝の命を受けたエジプト総督の軍に敗れて消滅したが、その後サウド王朝は復興され、勢力を拡大した。ついには 1925 年ヒジャーズ王国を滅ぼし、全アラビア半島を支配下におき、今日に至っている。

ワッハーブ派は、イスラーム原理主義の先駆的存在で、その極端な主張は、スンナ派、シーア派の双方から攻撃を受け、一時滅亡したが、サウド家と共に復活し勢力を拡大した。長い間、サウディアラビアの国教的存在で、9.11 テロの首謀者・オサマ・ビン・ラディンも、ワッハーブ派の教育を受けたと言われる。しかし、今日のサウディアラビア国は、女性の権利を徐々に拡大するなど、創始の頃のワッハーブ派の主張と異なる方式を採用していて、もはや国教的地位にはないと考えられている。　　）

（５）トランス・ヨルダン王国

ハーシム家のフサイン・イブン・アリーの息子の一人アブドラーは、父と同じく“アラブの反乱“に参加して戦ったが、さまざまな経緯の末、1923 年、ヨルダン川東岸に、トランス・ヨルダン王国と呼ばれる王国を、イギリスの委任統治のもとに作ることを、イギリスに認められた。

この国は 1946 年に独立を果たし、1949 年に、正式名称をヨルダン・ハシミテ王国に改めた。（“ハーシム家のヨルダン王国”という意味。）

こうして、イスラームの創始者ムハンマドの子孫の国が、今日の中東に存在している。

（バルフォア宣言は、1917 年に、パレスティナの地に、“ユダヤ人の居住区を認める”ことを宣言したものだが、これが、ユダヤ人のシオニスト運動に大きな力を与え、イスラエル建国のきっかけとなった。イギリス人のバルフォア自身は、「ロスチャイルド家の莫大な資金を軍に活用するための、単なる宣伝文句」としか考えていなかったと後に語っている。

バルフォア宣言とフサイン・マクマホン協定、サイクス・ピコ協定は、「互いに矛盾し、イギリスの 3 枚舌外交」と言われ、非難の的になっている。厳密に矛盾があるのか、という審議は別としても、この３つの宣言および協定が、今日の中東の混乱のもとになっていることは、間違いない。ただし、これらの宣言などが無かった場合に中東がどうなったのか、平和がやってきたのか、という点については、想像が難しい。

いずれにしても、ヨーロッパ列強が、自国の繁栄のために、ほしいままに武力で実現した植民地政策が、今日の中東、北アフリカの混乱の源であり、その結果、彼らは、今日、大量の移民への対処を強いられている。

中東地域は、混乱が続いているが、トルコは、第一次世界大戦後、ケマル・アタチュルクの指揮のもとに、小アジア半島を、ギリシャなどの侵攻から守り、サイクス・ピコ条約の密約にあった小アジア半島の分割案をはねのけて、民族として統一された国となり、しかも、議会制民主主義国家となった。その後、発展を遂げて大国となり、今も中東地域に大きな発言力を持っている。　　ただし、トルコが小アジア半島を確保できたことと引き換えに、クルド人が領土を確保できるとしたセーブル条約が破棄され、クルド人の苦難は今日も続いている。

（トルコ人は、モンゴル地方の出身と言われているが、長い時間をかけて西進してきた間や、その後、多くの民族と混血を繰り返してきた。その結果、今日ではコーカソイド民族として区分され、モンゴロイドとしての特徴はほとんどなくなっている。）

ケマル・アタチュルクは、トルコ共和国を創るにあたって、オスマン朝の支配を確実に排除することこそ、新生トルコには必要だと考えた。そのため、イスラームを政治から徹底的に排除する、いわゆる世俗国家政策を進めた。
ケマル・アタチュルクの方針は、トルコの教育にも徹底され、その方針のもとに育ったエリート層が、長くトルコ政治の中心となってきた。しかし、トルコの、比較的貧困な層の人びとは、このようなエリート層の政治に、反発してきた。その反発を取り入れたのが、現在のエルドアン大統領である。彼は、大勢の比較的貧困な層の人びとの意見を反映して、政治にイスラーム色を復活させつつあり、国論を2分している。これは、米国のトランプが、最近大統領になった手法と似通ったところがある。
エルドアンが政権をとってから、ある時期経済が躍進したことは事実であるが、彼は、クルド人に対して、それまでの大統領のとってきた融和策を止めて、強硬姿勢をとっているため、クルド人居住地区で争いが続いている。この争いは、ときおり、アンカラやイスタンブールに飛び火して爆弾テロとなり、観光客を激減させてしまった。
トルコの現在の経済見通しは、芳しくないように見える。
エルドアンは、権力確保のために、反対勢力に対して容赦なく公職追放などを行っている。そのため、国全体として、寛容さが失われてきているように思える。
これまでは、エルドアンの国論2分による政権確保は、成功しているように見えるが、最近では、イスタンブールとアンカラの2大都市の市長選挙で敗れており、基盤がぐらつき始めているように見える。　　）

（以上）